

資料編



学会創設の 先駆者たち

学会の前身である精神薬理
談話会の設立に貢献された
岩原信九郎先生、小林司先
生、柳田知司先生、我が国
の行動薬理学発展に大きく
貢献された田所作太郎先生
のご略歴を紹介します

学会創設に関わった先駆者たち

後の頁でご紹介する『精神薬理』第7号（精神薬理談話会ニューズレター）の小林司先生による岩原先生の追悼記事にもありますように、日本神経精神薬理学会は

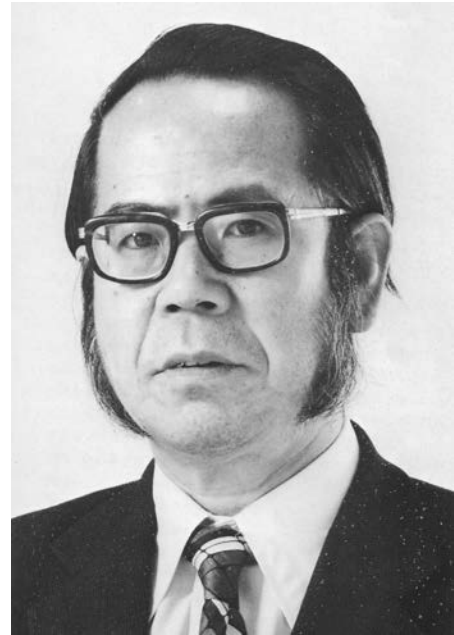
「当時（1970年のことと思われます）、学際的な精神薬理の話し合いができる会をつくりたいと考えていたので、薬理学から柳田知司さん、心理学から岩原さん、それに精神医学から私、と三人が発起人になろうという相談を新橋の小さな食堂でした」

のがそもそもの濫觴です。

そこでこのコーナーでは岩原信九郎先生、小林司先生、柳田知司先生、および、草創期の日本の行動薬理学の旗手としてご活躍され、本誌にも多くの先生方からご寄稿いただいた「赤城合宿」を主催された田所作太郎先生のご事績を紹介します。なお、小林先生と田所先生については鈴木勉先生からご提供いただいた資料に基づいています。

ご紹介の順番は50音順です。

岩原信九郎 (1923－1978)



写真は『生理心理学』のものです

愛知県豊橋市出身

1947年 東京文理科大学心理学科卒

1949年 ミズーリ大学留学

奈良女子大学助教授、東京教育大学助教授を経て

1972年 東京教育大学教授 (1976年より筑波大学教授併任)

主著

『ノンパラメトリック法 新しい教育・心理統計』日本文化科学社 (1964)

『教育と心理のための推計学』日本文化科学社 (1965)

『記憶力』講談社現代新書 (1976)

『生理心理学』 (星和書店, 1981)

主論文

Effects of chlordiazepoxide on passive avoidance responses in rats.
Psychopharmacologica. 23: 373-385 (1972).

Effects of chlordiazepoxide upon successive red-green discrimination responses in Japanese Monkeys, *Macaca Fuscata*, *Psychopharmacologia*, 30: 89-94 (1973)

Differential effects of chlordiazepoxide on simultaneous and successive brightness discrimination learning in rats. *Psychopharmacology*, 48: 75-78 (1976).

Effects of atropine upon the hippocampal electrical activity in rats with special reference to paradoxical sleep. *Electroencephalography and Clinical Neurophysiology*, 42: 510-517 (1977).

ご略歴はWikipediaに基づくものです

小林 司 (1929-2010)



- 1929年 青森県弘前市生まれ。
1953年 新潟医科大学ご卒業。
1959年 東京大学大学院博士課程修了、医学博士
1959～62年 フルブライト研究員として3年間、ピッツバーグ大学
ゲイルズバーグ精神医学研究所
(Galesburg Mental Health Centerのことかとも思うが不明) に留学
1962～?年 神経研究所(*) 勤務
1983～91年 上智大学カウンセリング研究所(**) 教授
(その後) 青山学院女子短期大学教授,
メンタルヘルス国際情報センター所長

日本精神衛生会理事、日本神経精神薬理学会評議員、日本病跡学会会員

主著：『新精神薬理学』（編集）医学書院（1968）、

『心にはたらく薬たち』ちくま書房（1985）ほか多数

趣味：世界的なシャーロック・ホームズ研究者として知られる。

日本シャーロック・ホームズ・クラブ主宰。エスペラント語にも堪能。

日本エスペラント学会顧問。

*：1951年、内村祐之東大医学部教授（精神科）が「明るく温かい、また自由な雰囲気の治療環境を求めて、また精神障害の治療の進歩を願って研究を重ねるために」（病院HPより）晴和病院を創立した。神経研究所はその母体となった研究所。現在は睡眠障害の研究が主体の公益財団法人。

**：1974年、当時の文学部心理学科小林純一助教授（イエズス会神父でもあった）の尽力によって創設。社会人を対象としたカウンセリング研修、カウンセラー養成、カウンセリングの普及と研究を行う研究期間であった。現在は「カウンセリング講座」（公開講座）として継続発展している。

田所作太郎 (1927-2011)



この写真は廣中が田所先生から頂いたものです

- 1927年1月7日 前橋市にてご出生
- 1949年3月 前橋医学専門学校（現群馬大学医学部）ご卒業
- 1950年5月 群馬大学医学部助手 薬理学教室
- 1955年5月 医学博士（東京慈恵会医科大学）
- 1955年6月 群馬大学医学部講師 薬理学教室
- 1959年10月 群馬大学医学部助教授 薬理学教室
- 1965年6月～1967年6月 ミシガン大学薬理学教室留学
- 1972年11月 群馬大学教授
医学部附属行動医学研究施設行動分析学部門創設
- 1978年10月 日本アルコール医学会長（第13回総会主催）
- 1992年3月 群馬大学定年退官
- 1993年4月～1999年3月 群馬県立医療短期大学
（現群馬県立県民健康科学大学）初代学長
- 2002年 勲三等旭日中綬賞

群馬大学医学附属動物実験施設長、群馬大学学生部長、群馬大学保健管理センター長、中央薬事審議会委員、文科省学術審議会委員、日本学術会議薬理学研究連絡委員会委員など学内外のご要職を歴任。日本薬理学会名誉会員、日本神経精神薬理学会名誉会員。

主著：薬物と行動：こころとくすりの作用（ソフトサイエンス社）1980

行動薬理学の実践：薬物による行動変化（星和書店）1991

麻薬と覚せい剤：薬物乱用のいろいろ（星和書店）1998

美しい花にも毒がある：薬と毒の50年（上毛新聞社）2002

趣味：エスペラント（高等エスペランチスト免許）、剣道、居合道（五段）

柳田知司 (1930-2016)



写真は2001年にJames Woods教授を横浜にお招きした
ときのものです

- 1930年 栃木県足利市生まれ
- 1956年 東京慈恵会医科大学卒業
- 1961年 エフェドリンの急性毒性の研究により医学博士
- 1960年-1965年 フルブライト留学生としてミシガン大学薬理学教室に留学
Dr. Seeversのもとで薬物依存の研究（自己投与実験）を開始
- 1965年 川崎市野川の実験動物中央研究所に医学研究所（後の前臨床
医学研究所）を創設。依存性試験をはじめとする非臨床試験を開始。
日本アルコール医学会（現日本アルコール・アディクション医学会）、
毒性研究会（現日本毒性学会）、臨床薬理学研究会（現日本輪両薬
理学会、Japan-Korea Joint Symposium on Toxicology（現The Asian
Society of Toxicology）、日本QA研究会など多くの学会・研究会の
創設にかかわる
- 1974年 WHOのScientific Group on Evaluation of Dependence Liability and
Dependence Potential of Drugsのメンバーとなり、1977年～2000年
までWHO Expert Committee on Drug Dependenceのメンバーとなる。
中央薬事審議会委員、国際協力機構（JICA）The Study Program on Drug Abuse
and Narcotic Controlなどを勤め、これらの功績により2010年、厚生労働省よ
り薬事功労者表彰を請ける。東京慈恵会医科大学客員教授。

※著書・論文は多数ありますが

Self-administration of psychoactive substances by the monkey.

Psychopharmacologia, 16: 30-48 (1969)

毒性試験講座第8巻『薬物依存、行動毒性』（地人書館、1990）をあげておきます

ご略歴は [Woods JH, Takada K. Obituray: Tomoji Yanagita, M.D., Ph.D. \(1930-2016\)-
psychopharmacologist Extraordinaire. Psychopharmacology \(Berl.\) 233: 3827-3828 \(2016\)](#)を
参考にしました

学会のあゆみ

学会の50年のあゆみを年表形式でご紹介します。そのときどきの社会の動きや、向精神薬の開発・発売などの話題も付け加えました。向精神薬関係は大塚製薬株式会社の菊池哲朗先生より情報のご提供をいただきました。

このコーナーは横組みです。

	理事長	年会长	年会開催地	合同開催	学会の主な出来事や事業	社会の動き・神経精神薬理学関連の出来事
1971			東京		学会の前身「精神薬理談話会」が発足（第1回集会を2月17日に呼びかけ、3月に開催） 談話会の事務局が神経研究所（神経研）に置かれる 神経研で第1回精神薬理抄読会開催（演者加藤	クロザピンの登場「臨床試験の報告（Angström, ドイツ）、顆粒減少による死亡例報告（1977年、フィンランド）、その後クロザピンの世界的撤退（Sandoz社、スイス）」
1972			東京			ドパミン自己受容体の提唱（Arvid Carlsson博士、スウェーデン）
1973			東京			Konrad Lorenz博士ら動物行動学者3名にノーベル賞；クロミプラミン発売
1974			東京			Snyderが抗精神病薬がドパミン受容体に作用することを報告
1975			東京		国立赤城青年の家にて8月の「精神薬理赤城合宿」が始まる（1990年まで連続16回開催）	ロッキード事件 Seemanらが抗精神病薬の臨床力価とドパミン受容体遮断作用との関連を報告 O'CallaghanとHoltzmanが痛覚のホットプレート試験を発表；Southern blot法の開発
1976			東京		談話会の成果としてSolomon H. Snyderの"Madness and the Brain"を翻訳出版（『狂気と脳』海鳴社）	Porsoltらがうつ様行動の強制水泳試験を発表 OltonとSamuelsonが八方向放射状迷路試験を発表
1977			東京			Northern blot法の開発
1978			東京			成田空港開港
1979	田所作太郎		前橋		第9回精神薬理談話会、これ以後会長制を取るこ とが決まる 1月23日第68回より精神薬理抄読会は星薬科大で 開催	D1およびD2受容体への分類（John Keababian博士とDonald Calne博士） Barnesがバーンズ迷路試験を発表 Western blot法の開発

	理事長	年會會長	年會開催地	合同開催	学会の主な出来事や事業	社会の動き・神経精神薬理学関連の出来事
1980		柳浦才三	東京			CrawleyとGoodwinが不安様行動の明暗箱試験を発表； Fanselowが恐怖条件づけ試験を発表
1981		亀山 勉	名古屋		談話会を「精神薬理研究会」に改称（第14回まで） 学術誌「薬物・精神・行動」刊行開始	マプロチリン発売 Morrisがモリス型水迷路を発表
1982		加藤伸勝	京都		星薬科大学で精神薬理抄読会100会記念大会を開催（実行委員長：柳浦才三）	リタンセリンの合成（Janssen社，ベルギー） オランザピンの合成（Eli Lilly社，英国研究所）
1983		渋谷 健	東京			東京ダイズニード開園 ミアンセリン発売
1984		中澤恒幸	名古屋			リスベリドンの合成（Janssen社，ベルギー） RichelsonとPfenningがイミプラミンのノルエピネフリン再吸収阻害作用を報告 PCR法の開発
1985		高折修二	京都		「日本神経精神薬理学会」に改称，理事会体制を取るが決まる ACNP(American College of Neuropsychopharmacology)との合同会議がハワイで開催される（以後4年ごと。合同会議は2005年まで。毎年参加の道が開かれたため合同会議は終わったが交流は現在も続く）	筑波万博開催 クエチアピンの合成（ICI社，米国）
1986	田所作太郎	稲永和豊	久留米			Rita Levi-Montalcini博士にノーベル賞
1987	田所作太郎	柳田知司	横浜			利根川進博士にノーベル賞 アリピプラゾールの合成（大塚製薬，徳島研究所）

	理事長	年会会長	年会開催地	合同開催	学会の主な出来事や事業	社会の動き・神経精神薬理学関連の出来事
1988	田所作太郎	更井啓介	広島			青函トンネル開通 クロザピンの再発見：治療抵抗性統合失調症への有効性を確認 (John Kane博士, 米国)
1989	森 温理	植木昭和	福岡			平成に改元 東西ドイツ統一
1990	森 温理	假屋哲彦	甲府		第17回CINP大会が京都で開催される	クロザピンの再登場：米国FDAによる治療抵抗性統合失調症の承認 (1980年代末から1990年代初めにかけて、クロザピニングにより, D1~D5まで5種類のドパミン受容体へ分類)
1991	植木昭和	田所作太郎	前橋		年会開催に合わせて記念講演会の開催 (市民を対象に薬物乱用問題を伝える)	バブル経済崩壊 Erwin Naher, Bert Sakmann両博士にノーベル賞 トラゾドン発売
1992	植木昭和	山下 格	札幌		5月30日星薬科大で第200回抄読会を開催	
1993	三浦貞則	小林雅文	東京			Jリーグ開幕
1994	三浦貞則	渡辺昌祐	岡山		「薬物・精神・行動」を「日本神経精神薬理学雑誌」に改称	リスペリドンの登場：SDA系薬剤として世界初 (Janssen社, 米国)
1995	三浦貞則	古川達雄	福岡			
1996	三浦貞則	融 道男	東京			オランザピンの登場：MARTAの概念提唱 (Eli Lilly社, 米国)
1997	古川達雄	福田健夫	鹿児島			クエチアピンの登場 (Zeneca社, 米国)
1998	古川達雄	村崎光邦	東京		ニコチン・薬物依存研究フォーラム設立, 学会誌に抄録掲載開始	長野オリンピック開催
1999	融 道男	笹 征史	広島			ドネペジル発売 フルボキサミン発売

	理事長	年会会長	年会開催地	合同開催	学会の主な出来事や事業	社会の動き・神経精神薬理学関連の出来事
2000	融 道男	佐藤光源	仙台		学会事業としての抄読会が幕を閉じる	うつ病でのケタミンの即効的臨床効果を確認 (Jhon Krystal 博士) パロキセチン、ミルナシプラン発売
2001	笹 征史	鍋島俊隆	広島	臨床神経精神薬理学 会	CINP Regional Meeting と同時開催	ユニバーサルスタジオジャパン開業 Avid Carlsson, Paul Greengard, Eric Kandel 三博士 にノーベル賞 ペロスピロン発売 ジブラシドンの登場 (Pfizer社, 米国) Geyerらが驚愕反応のブレパルス抑制を発表
2002	笹 征史	三國雅彦	前橋		抄読会の終了を受けて自主勉強会「薬物・精神・行動の会」を開始 (現在に至る)	アリピプラゾールの登場：世界初のドパミンD2受容体 パーシャルアゴニスト系抗精神病薬 (大塚製薬, 米 国)
2003	佐藤光源	中嶋敏勝	奈良			
2004	佐藤光源	加藤進昌	東京	日本生物学的精神医 学会		
2005	野村靖幸	小川紀雄	大阪	日本生物学的精神医 学会		愛知万博開催 Cryanらがうつ様行動の尾懸垂試験を発表
2006	野村靖幸	尾崎紀夫	名古屋	日本生物学的精神医 学会 日本神経化学会 初の三学会合同開催		

	理事長	年会会長	年会開催地	合同開催	学会の主な出来事や事業	社会の動き・神経精神薬理学関連の出来事
2007	樋口輝彦	吉岡充弘	札幌	日本生物学的精神医学学会		LY2140023の臨床報告：代謝型グルタミン酸2/3受容体アゴニスト，統合失調症のPhase 2試験でplaceboに対し有意な改善効果が確認され世界的に話題（Eli Lilly社，米国）
2008	樋口輝彦	山脇成人	東京	日本臨床精神神経薬理学会	AsCNPを設立し加盟学会となる	リーマンショック プロナンセリン発売
2009	米田幸雄	米田幸雄	京都	日本臨床精神神経薬理学会 第1回アジア神経精神薬理学会（AsCNP）		ゾニサミド（抗パーキンソン病薬として）発売 アトモキセチン発売 ミルタザピン発売
2010	米田幸雄	曾良一郎	仙台	日本臨床精神神経薬理学会	JSNP Excellent Presentation Award for CINPを制定	デュロキセチン発売
2011	山脇成人	鈴木 勉	東京	日本臨床精神神経薬理学会	学術奨励賞・優秀論文賞を制定 JSNP Excellent Presentation Award for AsCNPを制定	東日本大震災 エスシタロプラム発売 LY2140023の2回目の臨床報告：臨床効果を確認できず，その後に関発中止（Eli Lilly社）
2012	山脇成人	石郷岡純	宇都宮	日本臨床精神神経薬理学会	トランスレシーショナルメデイカル・サイエンス委員会設置	東京スカイツリー開業 山中伸弥博士にノーベル賞
2013	山脇成人	仲田義啓	那覇	日本臨床精神神経薬理学会	「精神病克服に向けた研究推進の提言」を公表	アリピプラゾールうつ病増強療法で発売
2014	山脇成人	岩田仲生	名古屋	日本臨床精神神経薬理学会	高齢者の向精神薬服用と自動車運転に関する要望を厚労省に提出 （日本うつ病学会と共同）	John O'Keefe博士(海馬研究) にノーベル賞

	理事長	年會會長	年會開催地	合同開催	学会の主な出来事や事業	社会の動き・神経精神薬理学関連の出来事
2015	石郷岡純	武田弘志	東京	日本生物学的精神医学学会	一般社団法人となる CINP CNS Drug Innovation Summitを共催	大村智博士にノーベル賞
2016	石郷岡純	池田和隆	ソウル		第30回CINPと同時開催 統合失調症薬物治療ガイドラインを公表	熊本地震発生 大隅良典博士にノーベル賞
2017	池田和隆	南 雅文	札幌	日本生物学的精神医学学会	クロザピンのモニタリングサービスマニュアルに関する要望書を適正使用委員会に提出 鍋島賞を制定	
2018	池田和隆	中込和幸	東京	日本臨床精神神経薬理学学会	学術誌をOpen Accessの Neuropsychopharmacology Reportsに改組 「精神疾患の克服と障害支援にむけた研究推進の提言」を発表 (日本精神神経学会等12学会および日本脳科学関連学会連合と共同)	本庶佑博士にノーベル賞 ブレクスピゾラゾール発売
2019	中込和幸	宮田久嗣	福岡	日本臨床精神神経薬理学学会 第6回アジア神経精神薬理学会 (AsCNP)		令和に改元 ボルチオキセチン発売
2020	中込和幸	大隅典子	仙台	日本生物学的精神医学学会 日本精神薬学会	「臨床試験に資する精神・神経疾患データベース構築と人口知能を用いた診断補助・ビッグデータ解析に関する産学官連携の提言」(日本脳科学関連学会連合として) 設立50周年	COVID-19蔓延で東京オリンピックが延期

Gallery Recollections

ここでは皆様からお寄せいただいた「思い出の写真」をご紹介します。

年会の歩みから

1984 第14回年会



Dr. RundrupとDr. Ennaを囲んで（加藤信先生提供）



応援指揮を披露する田所理事長
（加藤信先生提供）



日本式宴会で歌を披露する
Dr. Enna（加藤信先生提供）

1985 第15回年会



加藤信先生提供



加藤信先生提供

1986 第16回年会



鈴木勉先生提供

1991 第21回年会



鍋島俊隆先生提供
左から金戸先生，藤井先生，亀山先生，君島先生，鍋島先生

1992 第22回年会



油井邦雄先生提供

札幌にて
後列 塩田勝利先生
前列左から西嶋康一先生、
丹生谷正史先生、油井先生

1997 第25回年会



鍋島俊隆先生提供

2000 第30回年会



鍋島俊隆先生提供

2001 第31回年会 (JSNP/JSCNP/AsCNP合同)



鍋島 Maldonado 間宮

2001 31st JSNP/JSCNP/AsianCINP
広島



平松 吉田 天野

鍋島俊隆先生提供

2006 第36回年会



ASNP : 尾崎

JSN : 鍋島

JSBP : 岡崎



利根川

鍋島

Carlsson



鍋島

Carlsson

永津郁子

永津俊治

鍋島俊隆先生提供

2011 第41回年会



鈴木勉先生提供

赤城合宿



国立赤城青年の家（現：国立赤城青少年交流の家）は群馬県前橋市郊外、標高530メートルの高原に位置し、現在の敷地面積は244.246m²、宿泊定員400名の研修施設です。敷地内にはキャンプ場、体育館、柔道場、剣道場、多目的フィールド、講堂、音楽室など多様な施設を備えています。当学会では「談話会」時代の1975年から1990年まで全16回にわたって、毎年夏季（8月）にこの施設で研修会を開きました。研修会の運営には田所作太郎教授をはじめ群馬大学の方々が尽力されました。

上記の写真使用にあたっては国立赤城青少年交流の家の許諾を得ました。この青年の家はJSNPと同じ1971年に全国7番目の国立青年の家として誕生しました。奇しくも第1回談話会が開かれた1971年3月に主な建物が竣工し、研修生の受け入れを開始しています。

赤城合宿



1983年頃？（鈴木勉先生提供）



1983年頃？
体育行事（オリエンテーリング）
（廣中所蔵）

関連集会

The 1st International Symposium on Neurobehavioral Pharmacology
(Okayama, 2003)



(小野寺憲司先生提供)

関連集会

第5回薬物弁別研究会 (福岡, 1993)



(鍋島俊隆先生提供)
(左上の版画は山本経之先生の作品です)

ACNP

このACNPはAsian College of Neuropsychopharmacology (AsCNP)ではなくAmerican College of Neuropsychopharmacologyです。JSNPは1985年から2005年まで4年毎にACNPとの合同会議を開いていました。その後は日本からの参加も多くなり、ACNPも毎年開催で参加の機会も増えたので合同会議はお開きになったとのことです。鍋島先生ご提供の写真によってその歩みを振り返ります。



ACNP



いつもハワイで開かれていますがこれは偶然ではありません。日米双方が参加しやすい場所としてハワイを選んだという話を聞きました。

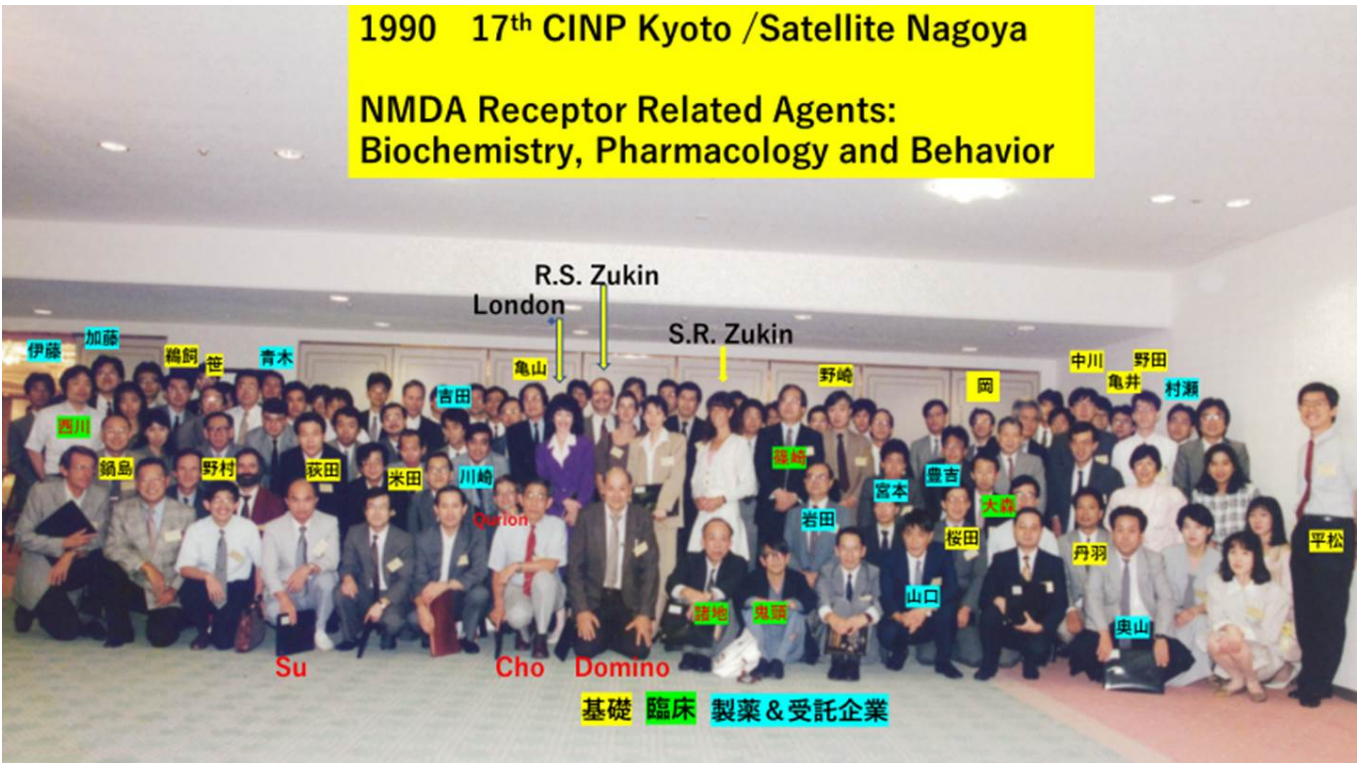
ACNP



2004年の第43回Meeting (Puerto Rico) にて
佐藤光源先生とSiegfried Kasper先生
(佐藤先生・鍋島先生のご提供)

CINP

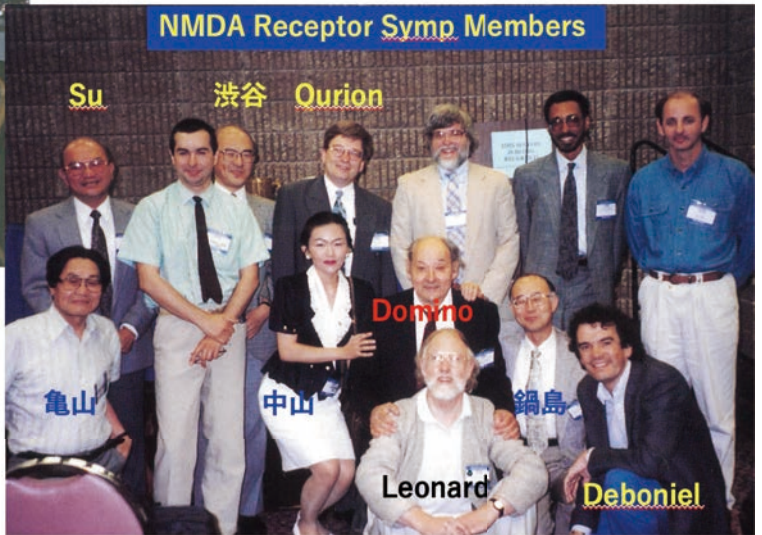
CINP関係の写真はミュンヘン大会関連のものを除いて鍋島俊隆先生にご提供いただきました。



CINP



1994 19th CINP Washington, DC



1996 20th CINP Malborne



CINP



山脇 鍋島



山田 鍋島 村崎

1998 21st CINP
Glasgow



奥山 松野 鍋島 龜山 鶴飼



Ray Leonard Altamura Paykel
 Porsolt 笹 Svensson
 Melzer T.N. Carlsson
 C. Kim

Foreign Corresponding Organizations Luncheon
 笹征史先生提供
 2002 23rd CINP
 Montreal

CINP



2004 24th CINP
Vancouver

鍋島 堀

Regional Meeting in Thailand 2006



千葉 茂

笹 征史

佐藤光源

CINP

2008
26th CINP
Munich



国際学会の前後に知己の研究者がおられる大学や研究所を訪問された方々も多いことと思います。これは油井邦雄先生がミュンヘン大会に参加されたときの写真で、上は会場風景。下はその帰途にロンドンのInstitute of Psychiatryを訪問されたときの様子です。

油井邦雄先生ご提供

CINP

山脇成人先生がCINP理事長に選出されたときの
祝賀会での写真です。



山脇 成人 教授 国際神経精神薬理学会（CINP）次期理事長就任記念祝賀会
平成24年12月16日 於 リーガロイヤルホテル広島

Archives

ここでは学会の初期の歩みを伝える『精神薬理談話会ニューズレター』と機関誌『精神薬理』、『赤城合宿の記録』（いずれも抜粋）および近年の歩みを伝える2002年～2019年までの年会抄録集の表紙やポスターなどをご紹介します。

精神薬理談話会ニューズレターと 「精神薬理」から

以下のものを掲載しています（高田孝二先生提供）。

以下の頁は横組みです。ページは本「記念誌」のページです。

精神薬理談話会ニューズレター	第1号	1971	全文	p.180
	第2号	1972	第1回講習会概要（柳田知司）	p.183
	第3号	1973	第3回談話会プログラム	p.185
	第4号	1975	第4回年会プログラム	p.186
精神薬理 （ニューズレター改題）	通巻 第5号	1976	もくじ	p.188
	第6号	1977	もくじ	p.189
	第7号	1978	もくじ 岩原さんを偲んで（小林司）	p.190
	第8号	1979	もくじ	p.192
	第9号	1980	もくじ 精神薬理談話会会則 赤城合宿報告（林哲）	p.193

精神薬理談話会ニューズレター 第1号

1971年6月10日発行 責任者 東京都文京区大塚 3-29-1
東京教育大学心理学教室 岩原信九郎

A. なりたち

精神薬理談話会は、小林司(臨床)、柳田知司(薬理)、岩原信九郎(実験心理)の3人が世話人になり、精神薬理談話会の第1回会合を1971年3月20日に開きました。その模様は後述致しますが、この会合に先立って有志の方にお送りした精神薬理談話会会員募集のお知らせは、次のとおりです。

B. <精神薬理談話会> 会員募集のお知らせ

精神薬理学は、精神医学、薬理学、心理学等、多くの分野の臨界領域として発達してきたために、これを学ぶ人々たちにとって「共通の話し合いの場がないといわれてきました。

そこで、ごく内輪の人たちだけで、集談会ないし勉強会を作ろうというところになりました。

この会は、話し合いの場を作ろうというだけのものではありません。会則とか、会長その他の役員も数ヶ月前に集談会を開くために必要な世話人だけを、まわりもち(先とえば、任期1年、重任せず、前任者の指名の法定)で、5人ほど決めておけば充分かと思っています。

この案内状を差上げた方以外にも入会希望者があるかと存知ですが、この会への入会資格として、実際にこの分野の仕事をしていて2年以上(共著も可)の関係論文があるか、又は会員3名以上の推せんがあるか入会を申し出られた人のうち、世話人1名以上の同意ある場合にとどめたいと思います。あまり多勢になると連絡が負担になりますし、実際の話し合いが難しくなるので、できれば30名内外の集まりにしたいと思います。

会費は、案内状やニューズレターの印刷、送付など実費として1971年12月31日までを暫定的に500円と定めます。入会金を集める予定は今のところありません。

このように、かなり自由な集まりですが、何でもしゃべれる広場にしたいと思えます。(外人の購読なども計画しています。)この趣旨に御賛同の方は、1971年2月28日までにお申し込みをさせていただきます。その時に皆様の御意見をおきかせいただければ幸いです。

1971年2月17日

岩原信九郎(東大、心理)
小林司(神経研、精神薬理)
柳田知司(実中研、医学研)
(ABC順)

申込先: (〒162 東京都新宿区弁天町91)
神経研究所: 小林司

C. 第1回薬会の概要

精神薬理談話会第1回集会は3月20日(土)午後12時30分から6時半まで神経研究所会議室で23名が参加して開かれました。当日は、世話人の挨拶に続いて、参加者が自己紹介をかねて、この会に対する希望を述べました。当日の講演は下記のとおりです。

テーマ：行動薬理学の最近の動向

I. 薬理から

1. 歴史的展望 実中研医学研
柳田 知司
2. STPのオペラント行動におよぼす効果
実中研医学研
安東 潔
3. diazepam の剤型と投与方法による
行動薬理学的効果の差異
群大 薬理
田所 作太郎

II. 心理から

行動薬理の最近の動向(文献的見地より)

ODPのラットの行動への効果

東教大 実験心理
岩原 信九郎

I. 臨床から

社会精神薬理学の登場

神経研

小林 司

その後で、参加者のそれぞれの分野からの質疑応答や意見交換がなされ、非常に有意義でした。

なお、この会の運営に関して次のような了解事項が決められました。

- 当分の間、学会形式にはせず、少人数の会員による自由な討論の場とする。
- 年に2回程度の会合を持ち、この他に勉強会(合宿)を開く。
- ニュースレターを刊行する。
- 会長はおかずに、もろまわりの世話人を設ける。

D. 抄読会について

精神薬理抄読会を毎月1回(第3木曜日)開くことにいたしました。第1回は、5月20日午後6:00~9:00神経研究所でHimwich & Alpers: Psychopharmacology. (Ann. Rev. Pharmacol., 10, 313-334, 1970.) を読みました。報告演者は神経研究所の加藤信で出席者16名。6月17日に第2回を行ないます。場所、時間は第1回と同じ。報告演者は中外製薬研究所の岩崎庸男。テクニストはKumar, Stollenman & Steinberg: Psychopharmacology(Ann. Rev. Psychol., 21, 597-628, 1970)です。第3回は7月15日(木)、テクニストは、Schickkraut: Catecholamine metabolism & affective illness. (In Himwich (Ed.): Biochemistry, schizophrenia and affective illness, Williams &

Wilkins, P.P. 198-229, 1971.) 担当は東京教育大学 長谷川康夫。
出席御希望の方は、加藤信(神経研究所 電 03-260-9171内28)または
岩原信九郎(東京教育大学 電 03-946-2151内559)へ予めお知らせ下
さい。テキストが手に入らない方は岩原に御連絡下されればコピーを無料でお
わけします。参加費は毎回1000円。会場で夕食をとることもできます。

E. 講習会について

第1回講習会を次の要領で開きます。

1. 名称: 「精神薬理談話会 第1回講習会
—— 向精神薬の評価技術」
2. 日時: 昭和46年6月19日(土) 9:30-17:00
3. 講習対象: 精神薬理学研究者、学生および製薬会社関係者
4. 会場: 千駄ヶ谷 野口記念会館の予定
5. 連絡先: 〒211 川崎市野川1433
実験動物中央研究所内

精神薬理談話会講習会係 (電 044-77-6916)

6. プログラム:

予定時間	講師	演題
9:30 ~ 9:40	談話会世話人代表 小林 可 哉	あいさつ
9:40 ~ 10:10	杏林大薬理 小林 龍男	わが国における精神薬理学の発達
10:10 ~ 11:00	神経研 精神薬理 小林 可 哉	精神薬理学の展望
11:00 ~ 11:10	休 憩	
11:10 ~ 12:00	集中研 精神薬理 柳田 知司	向精神薬の評価法 — 前庭床試験総論
12:00 ~ 13:15	休 憩	
13:15 ~ 14:05	教育大 実験心理 岩原信九郎	向精神薬の評価に利用される動物 行動の心理学的意義
14:05 ~ 14:55	集中研、精神薬理 安東 源 深	各種向精神薬の動物行動効果
14:55 ~ 15:10	休 憩	
15:10 ~ 16:00	群大、薬理 田所作太郎	オペラント行動による向精神薬の 評価法

-5-

F. 次回の「談話会」について

第2回の談話会を何時開くかについて只今計画中ですが、期日は8月上旬中、下旬のいずれがよいか(または他の期日)御希望を至急おきかせ下さい。場所、形式その他についても御希望を頂ければ幸いです。合宿勉強会と連続して涼しい旅館ではとも考えています。

G. 会員名簿(1971年4月現在)

下に会員名簿を載せます。1971年4月現在のものです。限りがあればお知らせ下さい。

名簿は個人情報なので
割愛しましたが、会員
数は34名です。
(廣中)

精神薬理談話会主催第1回講習会概要

実験動物中央研究所医学研究所 柳田知司

精神薬理談話会ニューズレター 第2号

1972年3月18日発行

責任者 東京都文京区大塚3-29-1
東京教育大学心理学教室
岩原信九郎

も く じ

精神薬理談話会主催第1回講習会概要	柳田知司	(2)
精神薬理抄読会の現況	加藤 信	(5)
精神薬理談話会第2回集会についてのお知らせ		(7)
第45回日本薬理学会関東支部会の紹介	石井靖男	(9)
わが国における精神神経科領域における精神薬理学の動向	原屋哲彦	(10.)
日本生理学雑誌(1971年)に掲載された行動に関する論文の紹介	長谷川和雄	(13)
精神薬理学関係外国図書リスト(1970-1971)	小林 司	(16)
最近の心理学関係の雑誌に掲載された行動薬理関係文献リスト	青木淳子・坂谷川藤夫	(21)

精神薬理談話会の活動の1つとして、この領域の現在の進歩を概括紹介するための講習会が昭和46年6月19日東京で開催された。最近はこの種の研修会は少なくないが、その多くは職業的講習会屋さんの主催によるもので、内容の選択あるいは講師の陣容等に必ずしも当を得ていないものもみられる。特に精神薬理学のごとき新しい学際領域の学問では、内容の把握が心づかしのいで、談話会が直接講習会を企画してこの領域の研究の現状と将来の予測に関する理解の一助としたのである。

プログラムは別記のとおりで、当日は朝早くから千駄が谷の野口英世記念会館に多勢の熱心な受講者がつむがけ、大学その他の研究機関関係者23名、および企業関係者86名の参加があった。

講習会は、まず談話会世話人代表の挨拶として神経研の小林司氏から、談話会の生い立ち、目的、および活動の抱負等について説明があった。次いで杏林大の小林昭男氏(元千葉大薬理教授)より、戦後間もなくの頃よりのわが国における精神薬理学黎明期の苦労話披露され、比較的若い年代層の者が多い談話会のメンバーや受講者にとっては興味深いお話であった。

次に小林司氏が、精神薬理学の展望と題して講義されたが、その主な内容は教材に盛り込まれているので重複を避け、もっと大事な話題として、氏の得意とする文献情報について詳しく話された。どの本にはどのような内容が書かれていて一読に値するとか、どのような人に適しているとか、あるいは文献情報入手の具体的方法等、多くの研究者にとって、これから自分で精神薬理学を学ぶ上に有益な手がかりを与えられた筈である。

次は中研の柳田が、向精神薬の前臨床評価法(動物実験)に関する基本的な概念と方法論について説明した。精神薬理学的アプローチには実験方法が大切であるが、動物実験の妥当性および有用性とその限界をはっきり認識してかからないと、とんでもない結論が引出され、あるいは研究全体が頓挫に陥れてしまふことの危険が強調された。

次に東京教育大の岩原氏により、向精神薬の前臨床試験法に関する各論的事項の一つとして、動物実験の最も基本となる個々の実験心理学的方法について、その詳細が紹介され、加えて、

動物行動が示す心理学的意義について考察が与えられた。動物行動についてははっきりした行動の基礎を捉え、それに沿って実験のデザインが組まれなければ、実験の目的および方法に関する妥当性は得られない。その意味で、精神医学的動物実験の基礎にはガッチリした実験心理学の基礎がなくてはならないのである。

次に奥中野の安東氏により、いわゆる向精神薬と呼ばれている個々の薬物が、動物行動特性オペラント行動にどのような影響をおよぼすかについて、現在までに判明している知見が紹介された。学問の進歩は常に一定のステップが踏まれなければならない。その意味で、今日の知見はまた臨床的効用と直接関係しない点が多く、それを期待している人々にとっては靴を履いて痛みを越くよりなりどかしさを感じられたことと似る。薬物のあまり失望したりすることなく、気象にこの領域の進歩に力を合せて行きたいものである。

次に群大の田所氏により、氏がミシガン大学留学時代、および帰国後続けて来られた2頭の動物の行動に関する相互関係におよぼす薬物の効果の意味ある知見が披露された。

頃は初夏、午後3時近くになると盛気を催すが、氏の動物オペラント行動をヒトになぞらえたニューモアたっぶりの説明に、場内は爆笑の渦であった。

最後に向精神薬の臨床的評価法に関する総論的事項を、北里大の原氏が講義された。話は精神安定薬の臨床評価技術の紹介を中心とし、臨床家の立場から向精神薬の評価という問題に対する意見と批判が披露された。人件における評価は、種々の制約があって非常に困難である。

しかし、ヒトに見られる種々の精神異常病態を動物で再現することが、まだ不可能な現在、向精神薬の評価は確実なところはそれが実験用いられる人件においてなされなければならない。その意味で精神薬理学の進歩が臨床評価技術の進歩に負うところが多く、今後の発展が大いに望まれるのである。

当日は、盛だくさんのプログラムにもかかわらず、皆熱心に聴講され、企画したものの一人として、目的を十分に果たしたものと報告を盛すことができた。会に御協力いただいた各位に厚くお礼申し上げる。

第3回精神薬理談話会年會開かる

精神薬理談話会ニューズレター 第3号

1973年12月29日発行

責任者 東京都文京区大塚3-29-1
東京教育大学心理学教室
岩原信九郎

1973.6.23 9:00~17:00

於：神経研究明講堂

当該談話は精神薬理に興味を持つ研究者のサークルとして3年前に誕生したものであるが、今回は公開制にしたため通知がゆきどいつたために、77名という多数が出席した。当日のプログラムは下記のとおり。ことにシンポジウムには関心が集まった。昼食時に差し雨が降り、急いで昼食をとり寄せるなど番狂わせの混乱もあったが、長老格の小林龍男杏林大教授もまじえて、討論も活路で非常に充実した会となった。

(小林・柳田両先生の報告を参考にした)

・第3回精神薬理談話会年會開かる	(1)
・精神薬理懇談會開かる	(2)
・精神薬理抄読會について	(3)
・心理学的方面よりの行動薬理学的研究法：animal psychophysicsを中心として	(9)
・わが國の精神神経科領域における精神薬理学的研究の動向	(10)
・文献紹介	
心理学より	野口 節子 (教育大)
薬理学より	大石 弘 (教育大)
精神薬理學關係係外國圖書リスト(その2)	上岡 利春 (三共)
・會員名簿	小林 可 (神経研)
・編集後記	

シンポジウムA

向精神薬の未来 (午前)

1. 薬理学の立場から 田所 作太郎
2. 精神医学の立場から 徳田 良仁
3. 社会的立場から 朝日新聞科学部 大熊 由紀子

シンポジウムB

新しい行動薬理学的実験方法……私の実験室での試み (午後)

1. 東京医大薬理 渋谷 健
2. 九大薬学薬品作用 植木 昭和
3. 大正大心理 重久 剛
4. 群大行動研 小川 治克
5. 藤沢薬品中央研 人見 正博

一般演題 (午後)

1. ドーパミンの脳室内注入によっておきるイヌの行動変化、およびレセルピンによるイヌの行動抑制におよぼすドーパミン脳室内注入の影響
演者 加藤 信 (神経研)
2. 行動薬理学への小型電子計算機導入の試み
演者 安東 深 (英中研)
3. 学習後投与法による pentobarbital の分離効果
演者 高橋 俊明 (東京教育大実験心理)
岩原信九郎 (東京教育大実験心理)
4. 視床下部生行動反応の条件づけと向精神薬の影響
演者 峰尾 好生 (星薬科大)

精神薬理談話会第4回年會開かる

精神薬理談話会ニユースレター 第4号

小林 司 (上智大)

1975年5月1日発行

編集者 東京都品川区広町1の2の58
 三共中央研究所 上岡利春
 東京都文京区大塚3-29-1
 東京教育大学 心理学教室
 岩崎庸男

1974年9月28日、さいわいに昨日の雨もあがって曇。例年どおり神経研究所の5階講堂で13時から開かれ、57名が参加して盛会であった。プログラムは下記に記すが、そのうち石井、加藤、小林、中島の口演は、研究報告ではなくて、総説であった。

この総会で新たに選ばれた新幹事5名(安東、岩崎、加藤、上岡、田所)が盛長となって口演を司会した。Aが大市におくれて、2時前除りBに喰いこんだため、BとDがしわよせて旺盛さを見たのは進行の不手際であった。しかし、あまり堅くならず自由な討論ができたのは他の学会に見られぬ特色であった。学術的な性格の良さ——各分野の専門家が教え合う——ととも、ずっと残していきたい気風である。

この総会も回を重ねるに従って内容が充実し、参加者もまた年々レベルが上がっているように思われる。しかし質問や討論が一部の人に傾ったのは遺憾であって、もっと若い人たちが発言が盛しかった。

石井・中島両氏の特別口演は深い学識がうかがえて、待るところ多穴であった。

19時教会。20時半迄、新幹事の事務引継ぎと打ち合わせが行われた。次回総会は1975年6月初旬になる模様である。新幹事の活躍が期待される。以下に各演題の抄録を掲載する。

— プ ロ グ ラ ム —

I 精神薬理学最近の進歩

A 基礎から (13:00~14:40)

1. サルの興奮行動の形成 安東 泰・柳田知司(美中研)

2. 薬弁別法によるラットの回遊学習に及ぼすC D Pの分離効果 梅田幸男・岩原信九郎(教育大)

3. α -Amphetamine及びmorphineによるマウスの自発運動への変化からみた動物初期体験の特異性 田所俊子・小川浩克・柴崎道子

田所俊子・大橋京一・代田美智子

平林収三・飯塚正博(群大行動研)

も く じ

○ 精神薬理談話会第4回年會開かる	1
○ 精神薬理談話会第5回年會のお知らせ	33
○ 精神薬理抄読会について	34
○ 薬物依存シンポジウム開かる	40
○ 文献紹介(心理学、薬理学、臨床)	42
○ 精神薬理学関係外国登録リスト	53
○ 米國心理学会における精神薬理学関係の発表演題について	56
○ 海外だより	62
○ 会員名簿	67
○ 編集後記	69

10a

4. 薬物効果検定からみたSidman 型回避に反応の学習成立過程とその指標について
栗原 久、奥泉靖子、田所作太郎（譜大行動研）
5. コンフリクト時の辺路系、視床、視床下部ニューロン活動に及ぼすクロルプロマジン、クロルジアセボキサイドの作用
梅本 守（塩野義研）
6. 精神分裂病治療薬とdo pamine 受容体阻害作用
石井靖男（日本化薬）
- B 座席から（14:50 ~ 15:50）
1. 向精神薬の副作用に関する研究……ヒトの服薬的所見と服用した向精神薬との関係
小坂 力（鳥取大）
 2. 臨床精神薬理学最近の進歩
加藤 信（神経科） 小林 司（上智大）
- II 向精神薬薬効評価の問題点（16:00 ~ 17:00）
中島 啓（吉魯製薬）

精神薬理

通巻第5号

(精神薬理談話会ニューズレター 改題)

1976年6月20日 発行

精神薬理談話会

もくじ

○特別寄稿「精神分裂病と精神薬理学」 台 弘	1
○精神薬理談話会第5周年会開かる	7
○精神薬理抄 既会について	36
○談話会メンバーによる訳書出版について	40
○精神薬理談話会 赤坂合宿報告	41
○精神薬理学関係外国書リスト(その4) 小林 司	43
○会員名簿	47
○編集後記	52

精神薬理

通巻第6号

(精神薬理談話会ニューズレター)

1977年6月1日 発行

精神薬理談話会

もくじ

○特別寄稿「向精神薬と入院期間」山下 格	1
○精神薬理談話会第6回年会開かる	8
○精神薬理抄読会について	29
○精神薬理談話会会計報告	31
○第2回赤城合宿報告	32
○精神薬理学関係外国図書リスト(その5)小林 司, 加藤 信	34
○会員名簿	38
○編集後記	43

精神薬理

通巻第7号

(精神薬理談話会ニューズレター)

1978年6月1日 発行

精神薬理談話会

もくじ

岩原さんを偲んで	1
特別寄稿 (1) 岩原信九郎	3
精神薬理談話会第7回年令開かる	21
特別寄稿 (2) 渡辺昭彦	53
精神薬理抄読会について	67
精神薬理談話会赤城合宿報告	69
留学だより	71
精神薬理学関係外国図書館リスト(その6)	74
精神薬理談話会1977年度決算報告	80
編集後記	87

岩原さんを偲んで

上智大学 小林 司

岩原信九郎さんが2月初めに突然他界されてからもう二カ月余りが過ぎてしまっただけで、
神経研究所を辞めて文筆業に転じてから、精神薬理への情熱は燃やしていても時間の都合が
つきにくくなくなって精神薬理の月例抄読会をずっと欠席していた私は、岩原さんがご冥途だっ
たことを迂闊にも全然知らないうちに、亡くなられたということを書儀に参列するまでどう
しても信じられずにいた。

いま、幽明さかいを異にして追悼文を記すことにならうとは……。

岩原さんと語り合ったのは僅か7年前のことなのに、どこでどうしてお会いしたのか、どう
しても思い出せない。当時、学際的な精神薬理の話し合いができる会をつくりたいと考えてい
たので、薬理学から柳田知司さん、心理学から岩原さん、それに精神医学から私、と三人が発
起人にならうという相談を新橋の小さな食堂でしたことまでは憶えている。
けれども、岩原さんをそれまで知らなかった私がどうしていっしょに旗あげをしたのだから、

可能性は三つばかりある。一つは岩原さんが私の書いた《新精神薬理学》を読んで、電話か
何かで接触され、談話会をつくらうともちかけて下さった、のかもしれない。神経研究所へ見
学に来られた時にそんな話になったような気がする。第二は、かねてからこんな会をつくりに
かと思っていた私が、東大心理の助教授をしていた今村護郎さんに誘いをかけたところ、それ
ならば岩原さんのほうが適任だからと紹介してくれた、という縁。しかし、この今村さんも昨
年故人になってしまい、今となっては尋ねるすべもない。第三は、1970年の秋に京都で行
われた動物心理学会か何かで三人が偶然に旗者として顔を合わせた、という可能性だ。

いずれにしても、心理畑から岩原さんがこの会に発起人として入って下さったことは、会に
とって大きなプラスになったと思う。

岩原さんの厳格な科学的態度と、論理的な思考、数学的な計算、正義感、学問への情熱、と
いったものがぼくたち会員に与えたよい影響は大きかった。

岩原さんのお宅は西武池袋線大泉学園駅の南口から一キロばかりのところにあつて、「ガラ
ス」と赤い字で書いた看板の横に入つてクラシック状に曲がった突きあたりだった。私の家が車
で二十分ばかりの近きだつた関係で、お互いに「遊びにいらしゃい」と何回も誘ひあひなが

らも、とうとう一度ずつの訪問に終つてしまつたのは残念だつた。岩原さんの家にはきれいな
芝生の庭があつて、ごたごたした都会の家並ばかり眺めていたぼくにはかなりびびりくつした記
憶がある。ぼくの汚い傘へ岩原さんが本を借りに来られた時には、なにしろ足の踏み場もない
くらい木の山で、断下がその重みによつて傾いてしまつていたので岩原さんはもつと驚いたよ
うだつた。

彼の出身が愛知県の豊橋で、ぼくがその隣にある蒲郡の出だということから、ぼくたちは同
郷のよしみを感じていたように思う。神経研究所で毎月行われた抄読会の滞りみちで故郷の話
をしたこともしばしばあつた。しかし、それはほんのひとときで、話題はいつも心理学に移
つていった。岩原さんが講談社現代新書に「記憶力」を書いたときは、参考書を30冊くらい
車に積んで、たいして知恵のないぼくにまであれこれと意見を求めながら、車を運転して大泉
まで送つて下さつたこともあつた。彼はユタの頃に米國に留学していたことも手伝つて、共
通の話題にこと欠かなかつた。彼はユタの頃に米國に留学していたことも手伝つて、共
通の話題にこと欠かなかつた。彼はユタの頃に米國に留学していたことも手伝つて、共
通の話題にこと欠かなかつた。

どんな理由からか、モミアゲを長くのばして、一見西部劇のヒーロー風の風貌だつたけれども、
外剛内柔でやさしい思いやりの豊かな、弟子おもひの人であつた。

日本の精神薬理学のバイオニアの一人であつたこの得難い人物を失つたいま、「はかなきも
のはこの世の始中終、まぼろしのごとくなくなる一期なり……いまにいたりてたれか百年の
形骸をたもつべきか、されば朝には紅顔ありて夕には……」という御文が今さらのよう
に思い出され、惜別の情がこみあげてきて、悲しみが新にぼくの胸を刺す。

精神薬理

通巻第8号

(精神薬理談話会ニューズレター)

1979年5月15日 発行

精神薬理談話会

もくじ

特別寄稿 (1) 「環境と薬物効果」 田所作太郎	1
第8回精神薬理談話会年会開かる	20
精神薬理抄読会について	57
精神薬理談話会赤城合宿報告	60
特別寄稿 (2) 「ソ連における行動薬理学の現況について」 林 哲	62
精神薬理学関係外国図書リスト (その7)	65
精神薬理談話会昭和53年度決算報告	70
会員名簿	71
編集後記	78

精神薬理

通巻第9号

(精神薬理談話会ニューズレター)

1980年7月1日 発行

精神薬理談話会

も く じ

特別寄稿.....	柳・浦才三	1
精神薬理談話会第9回年会報告.....		13
精神薬理談話会会則.....		38
精神薬理抄読会報告.....		39
精神薬理談話会第5回赤城合宿報告.....		42
ソビエトの精神薬理学.....	林 哲	45
精神薬理学関係外国図書館リスト(その8).....		47
1979年度精神薬理談話会決算報告.....		51
会員名簿.....		52
編集後記.....		60

精神薬理談話会則

19 May 1979

- 名・称 1. 本会は精神薬理談話会 (Japanese College of Psychopharmacology) と称する。
- 目的 2. 本会は精神薬理学領域の研究の発展を図ることを目的とする。
- 事業 3. 本会はその目的達成のため、年会、抄読会および合宿などを開催し、会誌を発行する。
- 会員 4. 精神薬理学領域の研究者で入会を希望するものは幹事会の承認を経て会員となることができる。
- 役員 5. 会員は本会の主催する行事に参加することができる。
また、会誌の配布を受け、会誌に投稿できる。
- 役員 6. 本会には、会長1名、代表幹事1名、幹事若干名、委員若干名をおく。
7. 会長は幹事会によって選ばれ、本会を代表し、年会を開催する。
8. 会長の任期は1年とする。ただし、再任をさまたげない。
9. 幹事は会員3名以上の推薦がある会員の中から幹事会が推薦したのものについて年度の総会の議を経て選出される。
10. 幹事は互選により代表幹事1名を選出し、幹事会を構成する。
11. 幹事会は本会の運営に必要な事項を審議決定する。
12. 幹事の任期は2年とする。ただし、再任をさまたげない。
13. 委員は年会委員、会誌委員、抄読会委員および合宿委員名若干名とする。年会委員は会長が委嘱し、会誌委員、抄読会委員、合宿委員は幹事会が委嘱する。
14. 委員は本会の事業を分担運営する。
15. 委員の任期は1年とする。ただし、再任はさまたげない。
16. 入会金・会費は会の運営事務および会誌の発行にあてる。
17. 入会金および年間会費は各1,000円とする。
18. 年会、抄読会、合宿の費用はそれぞれの参加費をもってこれにあてる。
19. 会計年度は4月1日より翌年の3月31日までとする。
20. 幹事会は前年度の会費会計を総会に報告し、承認を得なければならぬ。
21. 会則は幹事会および総会の議を経て改正できる。

- 38 -

第5回精神薬理談話会赤城台信報告

昭和54年8月18・19・20日

国立赤城青年の家

群大・医・行動分析 林 哲

本会の会則も5月の年会(群大)できまり、昭和54年は精神薬理談話会にとり記念すべき年である。そのためか合宿もいっなくなき活気にあふれ、すでに準備段階からその兆がみられた。例年の参加人員は25名前後であったが、今回は希望者も多く一時は35名になり、最大の枠を30名までと考えていた世話人としては、定員オーバー分をどうしようかというらしい恐喝をあげ31名と前年度比で6名増となった。特に今回の特色の一つは連年の参加者が多く、はるばる福岡、大阪、名古屋等から6名の方が参加されたことであろう。

今年も田所教授の司会で「薬物と一般行動 — その観察法について」をテーマに活発な討論が行われた。まずその内容について少しふれておこう。まず第1日目には「一般行動の考え方」と「日周リズムからみた一般行動」の2題を中心に討論が進められた。実中研の川口氏からは一般行動観察の方法論が紹介され、よりよい観察を行うための具体的な8項目の提案があり、最後にラット及びサルによる実例が示された。少しかわった問題提起といえば日周リズムの問題がそれに当るであろう。この問題は今まで特別に意識されてきたわけではない。しかし生体の機能の多くがリズムを示し、さらに薬物の感受性もリズムに同調して変化することを考えると、我々行動薬理学を専攻する者にとって、今後ますます重要性が大きくなるであろう。今回は実際に群大で得られたデータを中心に、ラットの示す日周リズムとそれに影響を与える因子について紹介した。同時に一つの応用問題として、位相によって変わる薬物効果を強調してみた。

第2日目は各研究室で実験使用されている観察法の紹介を星葉大(鈴木)、群大(栗原)、三共(上岡)の各会員から行っていた。星葉大及び群大からはいかにも教育機関らしく、学生実習の中から学んだ観察法の問題点が報告された。星葉大では標準薬と対比させながら未知動物を学生に試験させる方法をとっているとの報告があり、16項目にわたる行動観察を使用し各症状の有無についてチェックすることであった。この際運動活性の項に「もたれ反応」というのがあったが、この観察は学生にとって大変むづかしいとのことである。群大からも我々の教育の学生実習で使用している一般行動観察法について報告があった。中根眞實薬、鎮静催眠薬、抗

- 42 -

不安感、抗精神麻薬等の特徴を行動観察の中からとらえようという点が目的の1つである。問題点として5項目理あげられた。なかでも学生は個々の現象に目をうはわれ肝心の観察を忘れる傾向があり、特に運動量亢進、けいれん発現時等にそれが著しいという。この種の問題はともすれば我々もおかしそうな眼ちの1つであらう。最後に三共中央研からは新薬開発の奨励の中で一般行動観察法をどのようにとり入れているかについて迫り十分な報告があった。新検体がまわされると、初めマウスで一通りの観察を行うが、実用性の見通しがつくにつれ試験動物もネコからサルへとステップアップすること。それにしても数ある検体の中から最後まで残こり製品となる確率の小さいことにはおどろいた。一方問題点として観察項目によってはいわゆる“素人”と“玄人”で評価をめぐり大差の生ずることがよくあるとのことであった。これは一般行動観察法が個人の経験、技能、あるいは主観等によって左右されることを示しており、大いに意識しなけれはならない問題の1つであらう。また司会者の指名で登場した九大の片岡氏のマウス殺し行動の観察経験はいかにもユニークで興味深いものであった。また星葉大からの抗うつ薬のテスト法として紹介された30分程度のぬるま湯を入れたシリンドラ法は操作であった。マウスがなんとか沈まないようにと頑張る時間を測定するのは、とても奇抜なアイデアではあると思うが、マウスにとってはこれまた気の毒な話で、何ともいいようのない強い印象が残った。これも私が、まだ逃げない不安から来るのであらうか。

2日目の最後の報告として、昨年より私が担当しているソビエトの精神薬理学の紹介があったが、これについては別項をもうけるので参照していただきたい。

さて赤城合宿にとり忘れてはならないもう一つの面がある。自然に親しみ、その中で思いきり我が身を解放することである。今年は二年間続いたフィールドアスレティックスから大きく方向転換し、朝霧高原へとハイキングを行った。なかなかよいアイデアだったと思う。程く汗をかいたあと山のそと風、992mの高原よりのぞむ下界の山里、何ともいえない心のゆとりと満足感を感じる一瞬である。ハイキングといえれば合宿終了後希望者だけで行った赤城麓湖湖ツアーも傑作の一つであった。小沼でみた高山植物、水きりで薫心にかえった皆さんの美しそうな姿もさることながら、霧のベールにともすれば曇りがちな覚醒湖にあやしくもひびくアンデスもどきの笛の音は、まさに演出効果満点といおうか神秘的な感じさせました。これも皆藤本氏(群大)の特殊才能に負うところ大であった。

ともかく今年の合宿は登山あり、植物観察あり、さらに昔なつかしい竹馬あそびまで登場し、ともすれば肝心の勉強会も終ってみれば影のうすいものになりそうなる3日間であった。最後に連絡はるる赤城の山まで出かけて下さった参加者の方々に、又多忙中にもかかわらず我々

の合宿に特に関心をよせられ最後の司会をされた柳田先生にも、この紙面をおかりして心より感謝の意を表したいと思います。また来年の合宿でお会い出来ることを楽しみにしております。

昭和55年合宿計画

日時：昭和55年8月16・17・18日

8月16日午後2時までに国立赤城青年の家へ集合のこと

参加費： 3,000円

討論テーマ：精神薬理学における行動モデルについて

「赤城合宿」の記録

「第15回日本神経精神薬理学会赤城合宿記念出版」(1990)より、以下のものを掲載しています(原口裕文先生提供)。

ページは本「記念誌」のページです。

記念出版表紙	p.197
まえがき (栗原久)	p.198
目次	p.200
赤城合宿の歴史	p.201
特別講義および教育講演	p.202
写真集	p.203
日本神経精神薬理学会赤城合宿の記録と思い出執筆者一覧	p.205

動物の学習・記憶試験

— その実際と問題点 —

付：日本神経精神薬理学会赤城合宿の記録と思い出



栗原 久・平手謙二 編

群馬大学医学部附属行動医学研究施設行動分析学部門

まえがき

未曾有の高齢化社会を迎えようとしているわが国は、近い将来莫大な数の老年期痴呆患者を抱えることが予測され、その治療薬の開発が急がれている。痴呆は記憶障害を中核にしているところから、動物の学習・記憶試験が前臨床段階で実施され、そのスクリーニングをくりぬけた薬物が候補として開発が進められてきた。現在、脳機能改善薬、脳代謝賦活薬、その他、様々な名称のもとに多数が臨床に応用されている。しかし、期待する程の痴呆改善効果が得られていないのが現実である。これまでの動物実験が適切でなく、社会のニーズに応えていないのではないだろうか、反省させられる毎日である。

さて、1975年（昭和50年）より毎年開催されてきた日本神経精神薬理学会赤城合宿では、すでに1984年の第10回記念企画において「学習と記憶に関する動物実験—抗痴呆薬の探求をめぐる」をテーマに取り上げた。翌年、その内容は「抗痴呆薬の探求—学習と記憶の動物実験—」のタイトルで星和書店から出版された。これを契機として抗痴呆薬開発のための動物実験が並大抵のものではないとの認識が研究者の間に広まり、試験方法の改善が計られるようになった。しかし、5年間を経過しても、各種の記憶試験には考慮すべき点が多数残されている。

そこで、第15回合宿（1989年8月19日～21日）では、再度「動物の学習・記憶試験—その実際と問題点」をテーマに、話題提供と討論を企画した。この企画に対する関心の強さを反映して、第10回合宿と同様、全国各地から定員100名を越す多数の人々が赤城青年の家に集まった。

本書の前半は、この合宿で講演された先生方に、その内容に沿って原稿をお書きいただいたものである。赤城合宿は通常の学会やシンポジウムとは異なり、話題提供の後の質疑・討論に長時間がさかれている点に特色がある。本書には、それぞれの話題提供の後で行なわれた質疑・応答内容も収録されており、ホットな討議の様子が目に浮かんでくることと思う。討議の録音と速記録の作成には、日本ケミファ（株）の御協力を受けたことを付け加えて、感謝の意を表したい。

それぞれの話題提供と討議内容は充実しているが、本書に記載された試験方法をそのまま実行すれば学習・記憶試験は万全で、抗痴呆薬の探求にそのまま応用できるとは断言できない。しかし、本書を読むことにより、学習・記憶試験には研究者全員の協力が必要であることが、改めて痛感されることであろう。今後、さらに適切な学習・記憶試験方法を開発し、抗痴呆薬の探求に一步でも近づくことが、赤城合宿の開催と本書の出版を企画した我々の願いである。

さらに本書には、赤城合宿が15回も続いてきたことから、付録として、合宿の記録と参

加経験者の『思い出』を、写真とともに記載した。『思い出』は原稿の到着順に掲載されているので、年代が前後している点は御容赦願いたい。15回を通して完全参加したのは、群馬大・医・行動分析の田所教授と私（栗原）の2名だけであるが、合宿経験者にとっては思いを新たにすることであろうし、未経験者にとっては雰囲気を知るのに役立つであろう。

最後になってしまったが、御多忙中のところ、話題提供された先生方、および『思い出』の原稿をお寄せくださった皆様に心より感謝を申し上げます。また、編集にあたり助言をいただいた田所作太郎教授、赤城合宿に参加された皆様、赤城青年の家の職員、さらに合宿の世話人として労をいとわなかった群馬大・医・行動分析の教室員に厚く感謝する。

1990年8月2日

編者代表 栗原 久

目 次

まえがき	i
第15回日本神経精神薬理学会赤城合宿記念写真	iii
アカゲザルの遅延見本合わせ行動試験（廣中直行）	1
討論（司会：栗原 久）	10
ラットの空間認知獲得に関する基礎的検討（岩崎克典，松本禎明，藤原道弘）	19
討論（司会：若狭芳男）	35
迷路試験のねらいと問題点（岩崎庸男）	43
討論（司会：田所作太郎）	48
学習・記憶評価法としての弁別回避反応の意義（原 千高）	53
討論（司会：磯 博行）	63
スナネズミの回避反応の特徴（斎藤孝史）	71
討論（司会：栗原 久）	81
特別講義：学習・記憶試験の問題点のまとめ（田所作太郎）	87
討論（司会：鈴木 勉）	107
日本神経精神薬理学会赤城合宿の記録と思い出	109
赤城合宿の歴史	110
特別講演および教育講演	111
第1回精神薬理談話会赤城合宿報告（田所作太郎）	112
第5回精神薬理談話会赤城合宿報告（林 哲）	113
第10回を迎えた精神薬理赤城合宿（田所作太郎）	115
第15回日本神経精神薬理学会赤城合宿記録（栗原 久）	117
記念撮影でみる赤城合宿参加者の変化	119
写真でみる赤城合宿のスケジュール	121
赤城合宿の『思い出』（寄稿文）	126

赤城合宿の歴史

回次	開催日	主 題	リクリエーション
1.	1975. 9 .13~14	民族精神薬理学	山路散策
2.	1976. 9 . 3 ~ 4	行動薬理学と行動毒性学	なし
3.	1977. 9 .17~19	薬物効果と行動スケジュール	フィールドアスレチックス
4.	1978. 8 .26~28	薬物依存	フィールドアスレチックス
5.	1979. 8 .18~20	薬物と一般行動 — その観察方法 —	ハイキング (鍋割高原)
6.	1980. 8 .16~18	精神薬理学における行動モデル	ハイキング (赤城不動滝)
7.	1981. 8 .15~17	抗精神病薬の行動効果と神経 化学的効果の相関をめぐって	サイクリング
8.	1982. 8 .14~16	行動リズムと時間薬理学	オリエンテーリング
9.	1983. 8 .13~15	薬物の行動作用と種差・系統差	フィールドアスレチックス
10.	1984. 8 .26~28	学習と記憶に関する動物実験 — 抗痴呆薬の探求をめぐって —	ウォークラリー
11.	1985. 8 .24~26	目でみる行動薬理学 (V T R)	オリエンテーリング
12.	1986. 8 .23~25	行動と神経化学的变化との相関	ウォークラリー
13.	1987. 7 .18~20	海外の最新精神薬理学事情 — 臨床と行動薬理学の接点を求めて —	バレーボール・バドミントン
14.	1988. 7 .16~18	行動変化の定量化とその解釈	エアロビックス
15.	1989. 8 .19~21	動物の学習・記憶試験 — その実際と問題点 —	ソフトボール・バレーボール

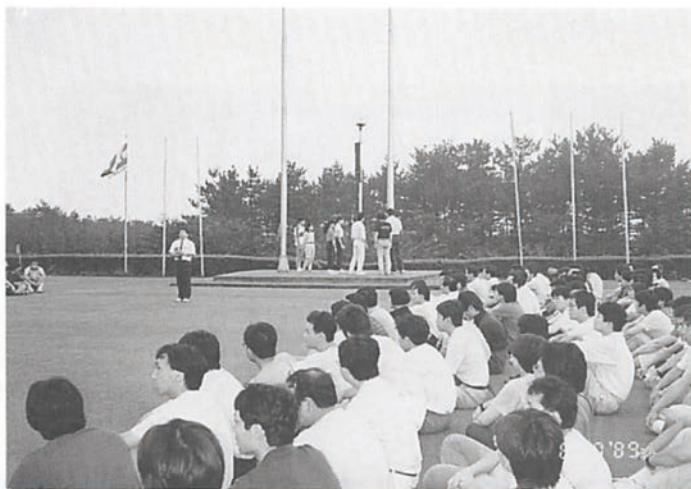
特別講義および教育講演

- 第6回 精神病の動物モデルについて
町山 幸 輝 (群馬大・医・神経精神)
- 第7回 心を分子で考える
大木 幸 介 (信州大・繊維・機能高分子)
- 第8回 睡眠・覚醒の日周リズム
高橋 康 郎 (東京都神経科学研)
- 第9回 飼育条件によるラットの個体特性の変容について
平尾 武 久 (群馬大・医・行動生理)
- 第10回 行動薬理的にみた抗痴呆薬の考え方
田所 作太郎 (群馬大・医・行動分析)
臨床的にみた抗痴呆薬の考え方
平井 俊 策 (群馬大・医・神経内科)
- 第11回 モノクロナール抗体でみた中枢神経系の構築
小幡 邦 彦 (群馬大・医・薬理)
- 第12回 動物の行動研究と精神医学の接点をめぐって
加藤 信 (実中研・精神薬理)
- 第14回 神経系における神経細胞骨格
石川 春 律 (群馬大・医・第2解剖)
ラットのオープンフィールド行動と回避学習の経時的変化
岩崎 庸 男 (筑波大・心理)
- 第15回 迷路試験の問題点のまとめ
岩崎 庸 男 (筑波大・心理)
回避試験の問題点のまとめ
田所 作太郎 (群馬大・医・行動分析)

赤城合宿写真集



第15回日本神経精神薬理学会赤城合宿記念撮影（1989.8.20）



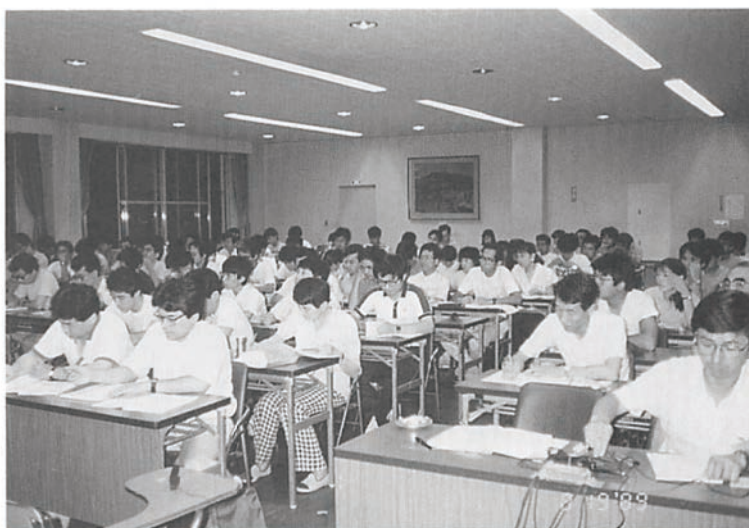
タベのつどい（第15回，1989.8.20）



風にたなびく学会旗

研修風景

(第15回, 1989. 8. 21)



スポーツ行事

ウォークラリー
ゴール到着後の休息
(第10回, 1984. 8. 25)



退所式

注) 後方に見える山が
鍋割山(標高1,332m)
です。



(第10回, 1984. 8. 28)

日本神経精神薬理学会赤城合宿
の記録と思い出執筆者一覧
(所属は当時)

第1回精神薬理談話会赤城合宿報告	田所作太郎	群馬大・医・行動分析
第5回精神薬理談話会赤城合宿報告	林 哲	群馬大・医・行動分析
第10回を迎えた精神薬理赤城合宿	田所作太郎	群馬大・医・行動分析
第15回日本神経精神薬理談話会 赤城合宿記録	栗原 久	群馬大・医・行動分析
第1回合宿のころ	加藤 信	城西病院精神科
赤城合宿の思い出	野村総一郎	藤田学園保健衛生大・ 医・精神医学
日の丸の旗のもとで学んだ精神薬 理学	安東 潔	実中研・前臨床医学研
私を精神薬理学に引き込んだ赤城 合宿	山脇成人	広島大・医・精神科
赤城合宿の思い出～長崎発	高橋正克	長崎大・薬・薬物
回避行動とは何か？	磯 博行	兵庫医大・心理
赤城合宿の思い出	益川善和	日本レダリー・生物研
赤城合宿の思い出	喜多大三	奈良県立医科大・薬理
赤城合宿で得たもの	稲川健太郎	中外製薬・探索研
赤城合宿の思い出	吉井利郎	藤永製薬・研
赤城で学んだもの	須藤伝悦	筑波大・医学系
赤城合宿の思い出	若狭芳男	実中研・前臨床医学研
赤城合宿に参加して	藤原 優	森永乳業・生物科学研
私にとっての赤城合宿	中谷 (小池) 洋子	
赤城合宿の思い出	長瀬守治	昭和薬品化工・研
赤城合宿の思い出	藤田明廣	塩野義製薬・研
赤城合宿の思い出	原口裕文	ヘキストジャパン・ 臨床開発
赤城合宿の思い出	岩崎克典	福岡大・薬・応用薬理
赤城合宿の思い出	上岡利春	三共・研
赤城合宿の思い出	臼田眞治	山之内製薬・中央研
赤城合宿の思い出	原 一雄	国際基督教大・教養
赤城合宿の思い出	高田孝二	実中研・前臨床医学研
赤城合宿に参加して	小原喜一	小原医科産業
赤城合宿の思い出	岩崎庸男	筑波大・心理学系
私にとっての赤城合宿	栗原 久	群馬大・医・行動分析

近年の年会抄録集の表紙・ポスター
(池田和隆・尾崎紀夫先生提供)

第32回 日本神経精神薬理学会年会
プログラム・発表要旨集

October 17-18, 2002
MAEBASHI

会長 三國雅彦
群馬大学医学部神経精神医学講座

第33回 日本神経精神薬理学会年会
プログラム・発表要旨集

October 8-10, 2003
NARA

会長 中嶋敏勝
奈良県立医科大学薬理学講座

第34回 日本神経精神薬理学会
Japanese Society of Biological Psychiatry
Japanese Society of Neuropsychopharmacology

第26回 日本生物学的精神医学会

合同年会
プログラム
講演抄録

BP/NP
2004
Tokyo

2004年7月21日・22日・23日
東京

Joint Meeting of the 27th Annual Meeting of the Japanese Society of Biological Psychiatry(JSBP)
the 35th Annual Meeting of the Japanese Society of Neuropsychopharmacology(JSNP)

第27回 日本生物学的精神医学会 第35回 日本神経精神薬理学会

OSAKA 2004
BP NP
合同年会

JSBP JSNP
プログラム
講演抄録

会期:平成17年7月6日(水)~8日(金)
会場:大阪国際交流センター

実行委員長 武田 雅俊 (大阪大学神経学) 委員長 小川 紀雄 (岡山大学神経学)

共催 財団法人 精神・神経科学振興財団

第28回 日本生物学的精神医学会
第36回 日本神経精神薬理学会
第49回 日本神経化学学会大会 合同年会

分子から読み解く精神機能と疾患

平成18年
9月14日(木)~16日(土)
名古屋国際会議場

■プレレクチャー
Aryd Carlsson
Osaka Sangyo University University of Chubu

■招待講演
梶子 悦彦
Nancy C. Andreasen
Willi 信隆
Florence Thibaut

■シンポジウム
脳内伝達物質受容体と気分・認知症との関係
脳内伝達物質受容体と気分・認知症との関係
脳内伝達物質受容体と気分・認知症との関係

学合会幹事会連絡先
TEL:052-882-0070 FAX:052-882-0084
email:bpnp@secretariat.jp

演題募集および下記ホームページへご来下し
<http://www.secretariat.ne.jp/bp-np-ne2006/>

共催 財団法人 精神・神経科学振興財団

Joint Meeting of the 29th Annual Meeting of Japanese Society of Biological Psychiatry (JSBP)
and the 37th Annual Meeting of Japanese Society of Neuropsychopharmacology (JSNP)

合同年会

第29回 日本生物学的精神医学会 第37回 日本神経精神薬理学会

プログラム
講演抄録

会期:2007年(平成19年)7月11日(水)~13日(金)
会場:札幌コンベンションセンター

第29回 日本生物学的精神医学会 会長 小山 周
第37回 日本神経精神薬理学会 会長 西岡 克弘

第18回日本臨床精神神経薬理学会 第38回日本神経精神薬理学会 合同年会

プログラム・抄録集

第18回日本臨床精神神経薬理学会 会長 **石郷岡 純**
東京女子医科大学薬学部精神医学専攻 主任教授

第38回日本神経精神薬理学会 会長 **山脇 成人**
広島大学大学院医歯薬学総合研究科 精神神経科学 教授

2008年 10月1日(水)・2日(木)・3日(金)
品川プリンスホテル アネックスタワー プリンズホール

グローバル時代における 基礎と臨床のクロストーク

●主催 第18回日本臨床精神神経薬理学会・第38回日本神経精神薬理学会 合同年会
●共催 財団法人 精神・神経科学国際財団
●協賛 財団法人 日本薬学会・社団法人 日本精神神経学会・社団法人 日本病院薬剤師会
社団法人 日本薬理学会・有限責任中興法人 日本臨床薬理学会

第19回 日本臨床精神神経薬理学会 第39回 日本神経精神薬理学会 合同年会

健やかなところを守る薬理学—基礎と臨床のコラボレーション—

プログラム・抄録集

●開催 2009年 11月13日(金)・14日(土)・15日(日)
●会場 国立京都国際会館
●主催 第19回日本臨床精神神経薬理学会
大森 哲郎 (東北大学大学院ヘルスケア/サイエンス研究科薬理学専攻 教授)
第39回日本神経精神薬理学会
米田 幸雄 (東北大学大学院自然科学研究科薬理学専攻 教授)

●主催 第19回日本臨床精神神経薬理学会
第39回日本神経精神薬理学会 合同年会
●共催 財団法人 精神・神経科学国際財団
山脇 成人 (広島大学大学院医歯薬学総合研究科 精神神経科学 教授)
●協賛 財団法人 精神・神経科学国際財団
●協賛 社団法人 日本薬学会・社団法人 日本精神神経学会・社団法人 日本病院薬剤師会
社団法人 日本薬理学会・一般社団法人 日本臨床薬理学会

第20回日本臨床精神神経薬理学会 第40回日本神経精神薬理学会 合同年会

プログラム・抄録集



次世代の精神薬理学を目指して —こころの診療と脳科学への貢献—

第20回日本臨床精神神経薬理学会 会長 **大谷 浩一**
山形大学薬学部精神医学講座 教授

第40回日本神経精神薬理学会 会長 **曾良 一郎**
東北大学大学院薬学専攻 精神・神経科学学 教授

会期: 2010年9月15日(水)~17日(金)
会場: 仙台国際センター

2010年9月14日※ 精神薬理学公開集中講座

●主催 第20回日本臨床精神神経薬理学会・第40回日本神経精神薬理学会 合同年会
●共催 財団法人 精神・神経科学国際財団
●協賛 社団法人 日本薬学会・社団法人 日本精神神経学会・社団法人 日本病院薬剤師会
社団法人 日本薬理学会・社団法人 日本薬理学会・一般社団法人 日本臨床薬理学会

第21回日本臨床精神神経薬理学会 第41回日本神経精神薬理学会 合同年会

向精神薬を科学する —薬物療法をより良いものとするために—

プログラム・抄録集

第21回日本臨床精神神経薬理学会 会長 **野村 総一郎**
徳島医科大学精神科学講座 教授

第41回日本神経精神薬理学会 会長 **鈴木 勉**
富山県立大学薬学専攻 教授

2011年10月27日(木)~29日(土)
京王プラザホテル

●主催 第21回日本臨床精神神経薬理学会・第41回日本神経精神薬理学会 合同年会
●共催 財団法人 精神・神経科学国際財団
●協賛 社団法人 日本薬学会・社団法人 日本精神神経学会・社団法人 日本病院薬剤師会
社団法人 日本薬理学会・社団法人 日本薬理学会・一般社団法人 日本臨床薬理学会

第22回日本臨床精神神経薬理学会 第42回日本神経精神薬理学会 合同年会

プログラム・抄録集

第22回日本臨床精神神経薬理学会 会長 **下田 和孝**
昭和大学薬学部精神医学講座 主任教授

第42回日本神経精神薬理学会 会長 **石郷岡 純**
東京女子医科大学薬学部精神医学専攻 主任教授

Collaboration loops between bedside↔bench —精神神経科領域の薬物治療個別化を目指して—

2012年 10月18日(木)~20日(土)
橋本農総合文化センター
宇都宮東武ホテルグランテ

●主催 第22回日本臨床精神神経薬理学会・第42回日本神経精神薬理学会 合同年会
●共催 財団法人 精神・神経科学国際財団
●協賛 社団法人 日本薬学会・社団法人 日本精神神経学会・社団法人 日本病院薬剤師会
社団法人 日本薬理学会・社団法人 日本薬理学会・一般社団法人 日本臨床薬理学会

第23回 日本臨床精神 神経薬理学会 第43回 日本神経精神 薬理学会 合同年会

プログラム・抄録集

効率性と有用性の両立を目指した薬物療法 —寛解と回復に向けて— Efficiency + Efficacy in Neuropsychiatric Pharmacotherapy

2013.10.24(木)~26(土)
沖縄コンベンションセンター

●主催 第23回日本臨床精神神経薬理学会
近藤 毅 (神戸大学大学院医学研究科薬理学専攻 教授)
第43回日本神経精神薬理学会
神田 義博 (東北大学大学院自然科学研究科薬理学専攻 教授)

●主催 第23回日本臨床精神神経薬理学会・第43回日本神経精神薬理学会 合同年会
●共催 財団法人 精神・神経科学国際財団
●協賛 社団法人 日本薬学会・社団法人 日本精神神経学会・社団法人 日本病院薬剤師会
社団法人 日本薬理学会・社団法人 日本薬理学会・一般社団法人 日本臨床薬理学会

第24回
日本臨床精神神経薬理学会
第44回
日本神経精神薬理学会
合同年会

2014年
11月20(木)・22(土)
名古屋国際会議場
(名古屋市中熱田区熱田西1-1-1)

プログラム・抄録集

会社
第24回日本臨床精神神経薬理学会
尾崎 紀夫
北浜大学大学院医学部研究科
脳神経学・薬とこころの神経学分野 教授
第44回日本神経精神薬理学会
岩田 伸生
福山大学大学院
脳神経科学 教授

双方向性トランスレーショナル研究の実現:
Bridging the gap between bedside and bench

第45回
日本神経精神薬理学会
第37回
日本生物学的精神医学会

プログラム・抄録集

精神・神経疾患における
トランスレーショナルリサーチの実践と展開

合同年会
2015.9.24(日) ▶ 26(火)

タワーホール船堀 (東京都江川区船堀4-1-1)

第46回 46th Annual Meeting of
the Japanese Society of Neuropsychopharmacology
日本神経精神薬理学会年会

プログラム・抄録集

★ 開催日 2016.7/2(土)・3(日) July 2(Sat)-3(Sun), 2016
★ 開催地 韓国ソウル (COEX) COEX, Seoul
★ 主催者 池田 和隆 (福山大学 脳神経科学 教授)
Kazuhiko Ikeda
Tokyo Metropolitan Institute of Medical Science

産学官連携と国際連携
Public-private partnership & International alliance

JSNP2016 Seoul

脳と心のフロンティア
「知」と「療」の連携

合同年会 2017 SAPPORO
第39回日本生物学的精神医学会
第47回日本神経精神薬理学会

プログラム・抄録集

2017年9月28日(木)~30日(土)

第39回 日本生物学的精神医学会
久住 一郎 (北海道大学 大学院医学研究科 脳神経学 教授)
大会長
第47回 日本神経精神薬理学会
南 雅文 (北海道大学 大学院医学研究科 薬理学 教授)
会場
札幌コンベンションセンター
〒003-0006 札幌市白石区東札幌6-1-1

第28回日本臨床精神神経薬理学会
第48回日本神経精神薬理学会
合同年会

プログラム・抄録集

第28回日本臨床精神神経薬理学会
会長 齋藤 新一郎 (杏林大学医学部脳神経科学 教授)
第48回日本神経精神薬理学会
会長 中込 和幸 (国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター
脳神経研究 教授)

精神神経薬理学の
イノベーション創出
Developing Innovation in Neuropsychopharmacology

2018.11/14(水)・15(木)・16(金)
東京ドームホテル

19th Annual Meeting of JSNP / 29th Annual Meeting of JSCNP
第49回日本神経精神薬理学会
第29回日本臨床精神神経薬理学会
抄録集

第29回日本臨床精神神経薬理学会
くすりからこころをかへる
2019年10月11日(日)・12日(月)

第49回日本神経精神薬理学会
薬物・精神・行動を紡ぐもの
2019年10月12日(月)・13日(火)

会長
吉村 玲児 (東北大学 脳神経学 教授)
副会長
新聞 隆弘 (東北大学 脳神経学 教授)

会長
宮田 久嗣 (東北大学 脳神経学 教授)
副会長
小高 文聡 (東北大学 脳神経学 教授)

会場
福岡国際会議場・福岡サンパレスホテル&ホール
〒815-0001 福岡県福岡市東区 博多 博多サンプラザ 11
TEL 092-820-0711 (FAX) 092-820-0719 E-Mail: info@2019jcn.jp

Towards the Future

JSNP50周年にあわせて行われた
アンケート調査の報告です

JSNP『現在から未来について本学会が行うべきこと、 期待についてのアンケート』調査結果

50周年記念事業ワーキンググループ

2020年は日本神経精神薬理学会(JSNP)設立50周年の記念すべき年会(年会長:大隅典子先生)となります。2020年大会では、50周年記念事業の一環として『JSNPの過去・現在・未来』というテーマで記念シンポジウムを開催致します。会員の皆様とJSNPの歴史を振り返り、現在そして未来へのミッションとヴィジョンについて議論し、本会が発展的に目指していく方向性について考えたいと思います。本稿では、シンポジウム開催に先立ち実施した『現在から未来について本学会が行うべきこと、期待についてのアンケート』の調査結果についてまとめました。

【調査目的】本学会は、精神薬理学の学際的研究発表の場としてのみならず、臨床精神医学、薬理学、脳科学を応用した精神・神経疾患の病態解明、診断技術の開発、そして有効性と安全性の高い薬物療法・非薬物療法の確立に資する活動・提言を行ってきました。特に最近では、基礎・臨床の融合をもとに、産官学連携による創薬研究の推進、神経精神薬理学の国際連携・役割強化、中枢薬開発の基盤整備のための競争前産官学連携事業の準備、精神神経疾患薬物療法の向上と均霑化を図るガイドラインの策定・拡充と講習、機関誌のリニューアルなどを進めてまいりました。しかしながら、近年の技術革新、大規模ゲノム研究などの進展はあるものの、いまだ精神・神経疾患の克服には発症・病態メカニズムの解明、治療技術・診断技術・バイオマーカーの開発と早期発見、妥当性の高いモデル動物の開発、リソース・データ整備とその活用方法など、多くの課題が残されています。

これらの解決のために、現状の認識や把握、今後本学会が取り組むべきこと、また目標とすべき到達点などについての意見・要望・期待を集約し、会員一同で想いを共有することを目的に、アンケート調査を実施しました。

【調査期間】2019年11月27日～2019年12月6日

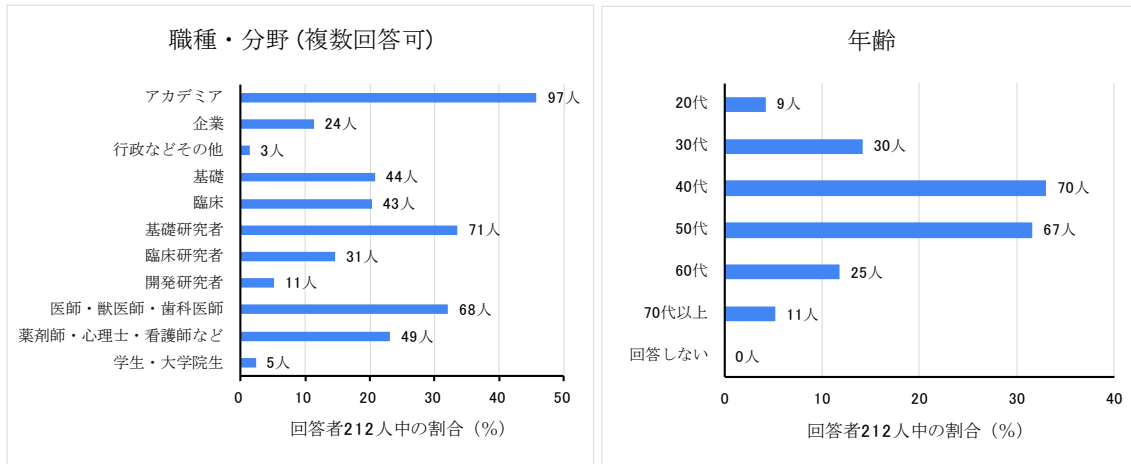
【対象および人数】JSNPのすべての会員1,367名(うち学生会員207名、評議員330名)

【有効回答数】212名

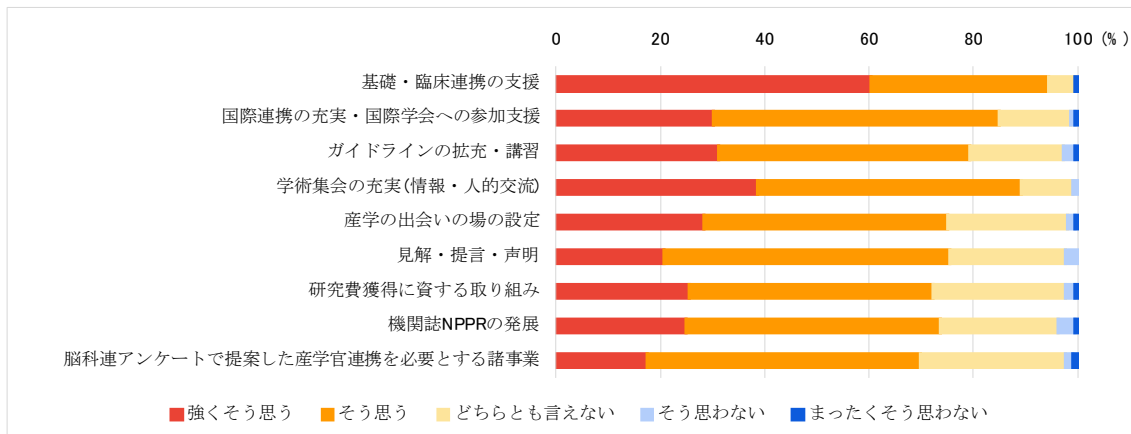
【回答方法】調査はオンラインアンケート形式で、無記名かつ、個人名や機関・企業名が特定されない形で実施しました。

【調査結果】

1. 回答者の属性について

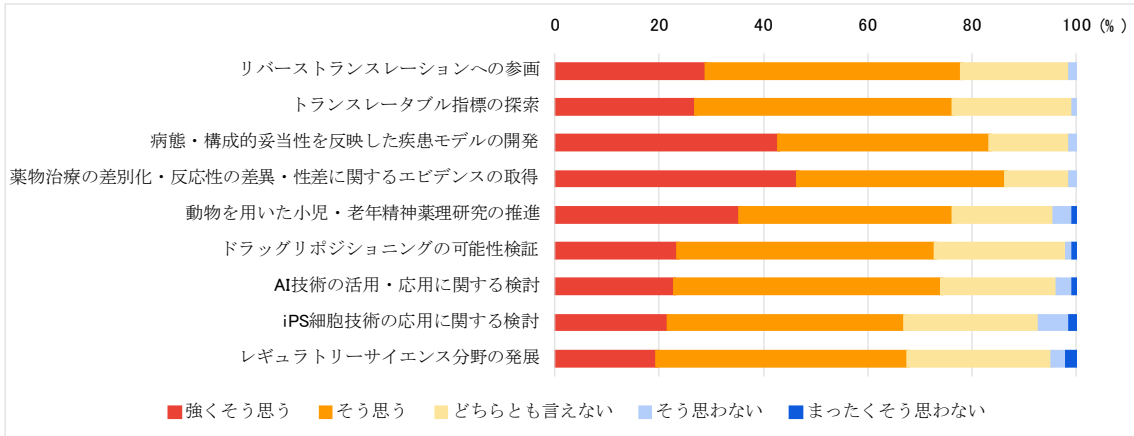


2. 本学会が目指す方向性・期待について

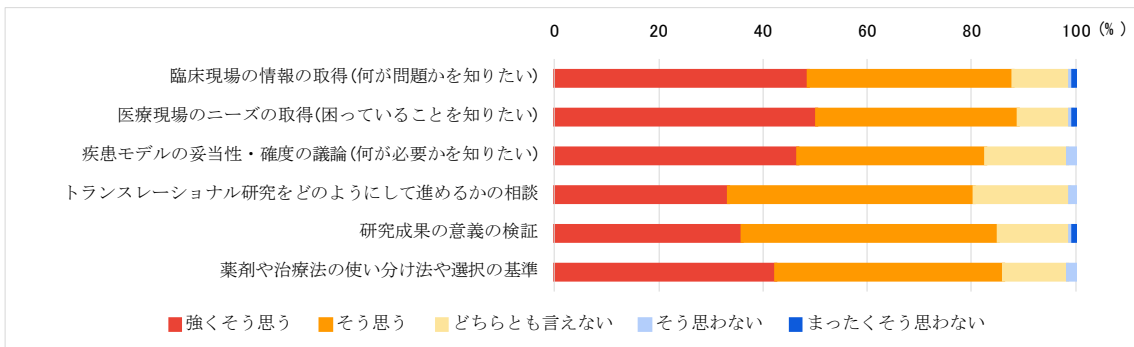


3. 基礎・臨床連携について

- (主に臨床研究者への質問) 基礎研究者に期待すること・求めること

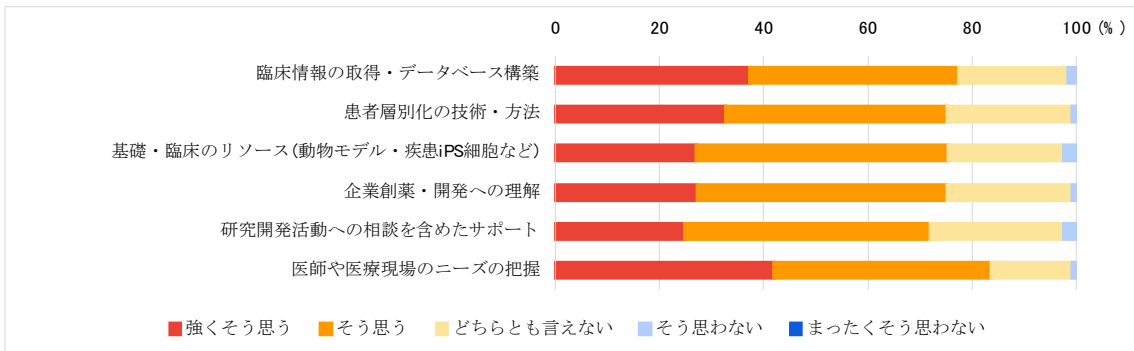


- (主に基礎研究者への質問) 臨床研究者に期待すること・求めること

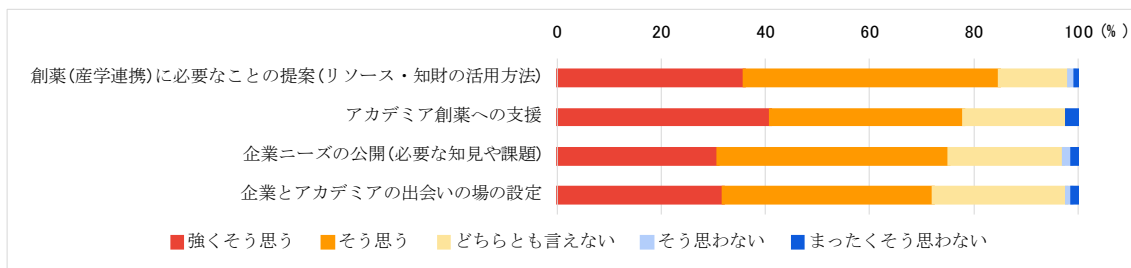


4. 産官学連携について

- (主に企業に所属される方への質問) アカデミアに期待すること・求めること

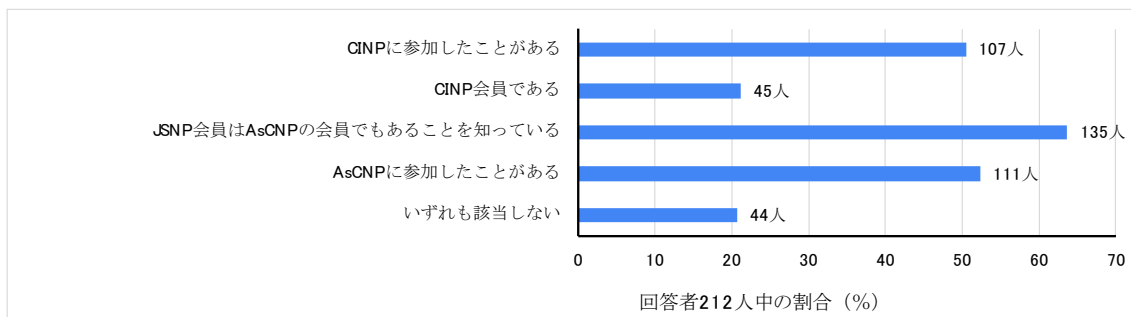


- (主にアカデミアに所属される方への質問) 企業に期待すること・求めること

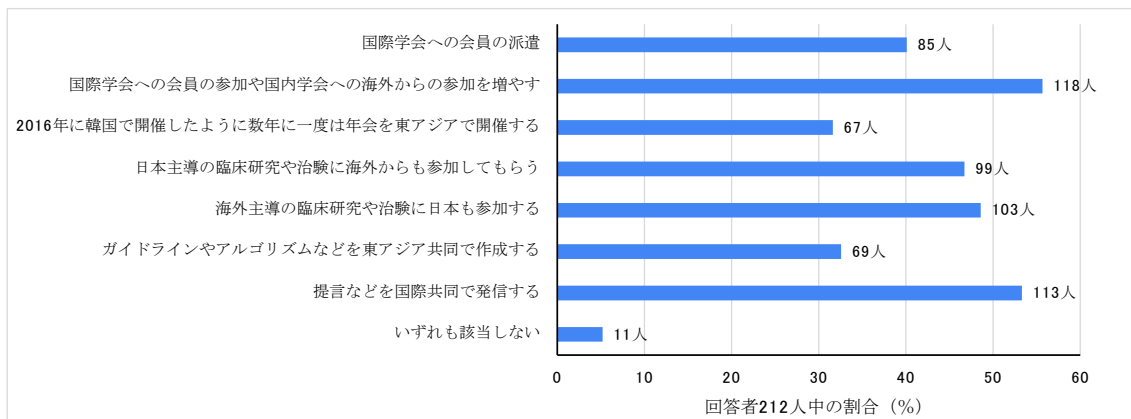


5. 国際連携について

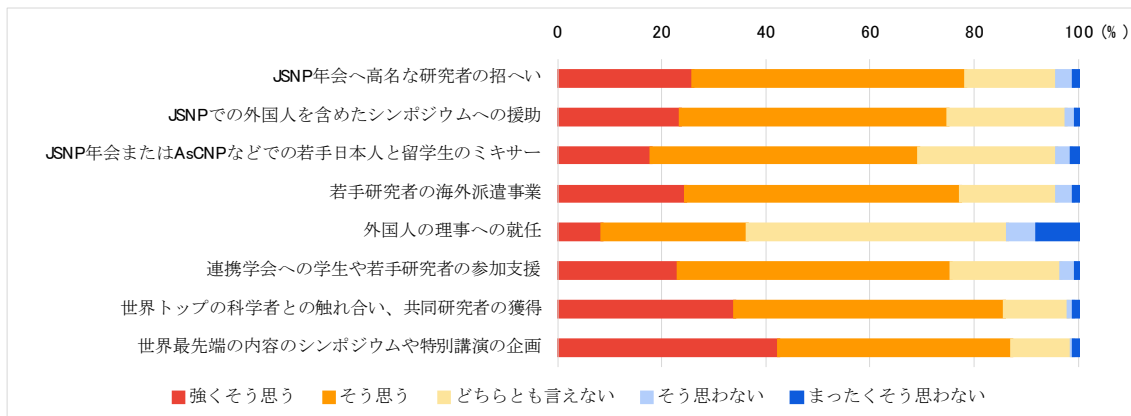
● 連携学会との関係 (複数回答可)



● 国際連携のイメージ (複数回答可)

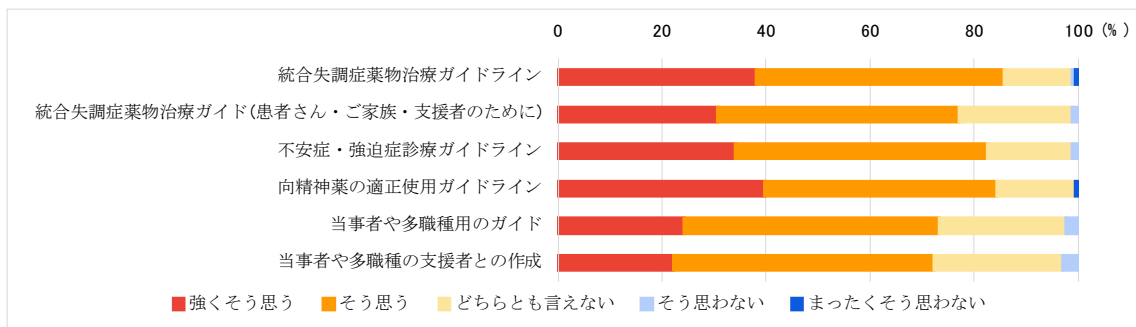


● 国際連携に関連して期待すること

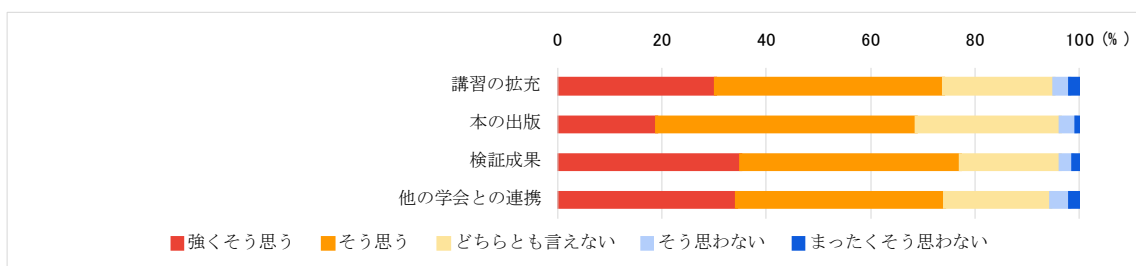


6. ガイドラインについて

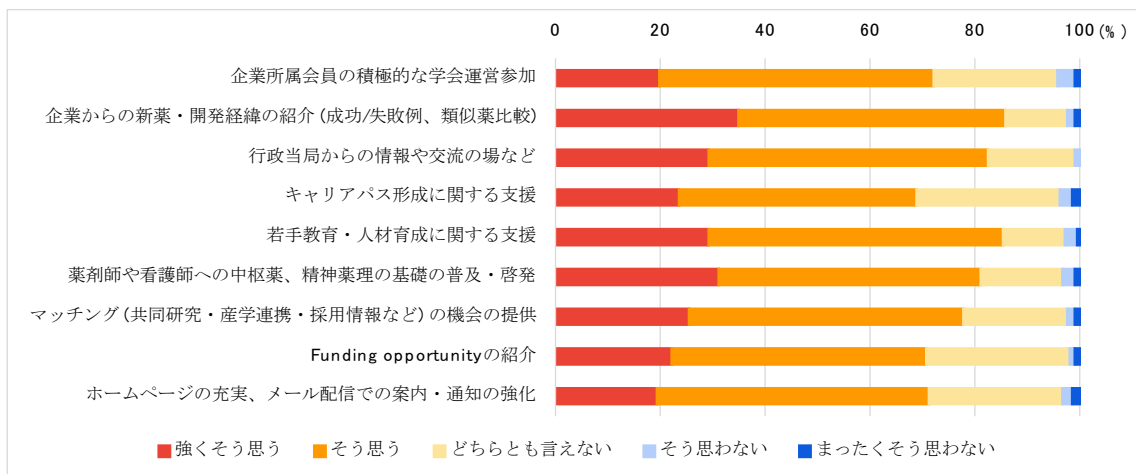
● 作成・改訂に期待するガイドラインとその方法



● ガイドライン普及・教育・検証に期待すること



7. 学術集会／その他学会活動について



編集後記

まずもって、このたび「記念誌」にご寄稿いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。JSNP ロゴおよび『日本神経精神薬理学雑誌』の表紙ビジュアルアートの「記念誌」表紙への引用につきましては、ご制作の徳田良仁先生よりご許可をいただきました、あらためて御礼申し上げます。「国立赤城青少年交流の家」事業推進系の皆様にはホームページトップの写真引用許諾をいただき、ありがとうございました。「50周年記念ロゴ」を制作された山本経之先生はじめ、貴重な写真や資料のご提供やご助言をいただいた多くの先生方に改めて御礼申し上げます。お名前は該当箇所に記してあります。編集作業のさなかに日本の行動薬理学を支えてこられた栗原久先生の訃報に接しました。この場をお借りしてご冥福をお祈り申し上げます。このような冊子の編集という仕事は初めての経験で、その過程で多くの先生方にずいぶん勝手なお願いもしたことと思います。あらためてお詫び申し上げます。可能なかぎり原文のスタイルを保持しようと試みましたが、字間や行間にやや不統一もあります。ご容赦いただければ幸いです。校正には東京都医学総合研究所の芹田由紀さんのお手を煩わせました。深謝します。それでも思わぬミスがあるかも知れません。ご叱正をお待ちします。JSNP50周年を契機にさらなる飛躍をお祈りいたします。この「記念誌」がいささかでもそのお役に立てば幸いです。

2020年8月1日

日本神経精神薬理学会 50周年記念事業

ワーキンググループ

(記念誌編集担当：廣中)